

# ひらがな時課経抄 目次

夜半課	省略
早課	1
第一時課	28
第三時課	37
第六時課	47
聖體禮儀代式	56
第九時課	68
晩課	78
晩堂大課	93
晩堂小課	省略
八調経抄本	129

西日本主教区「奉神礼基礎講座」開講にあたって、若い世代にも誦経に親しんでもらうために『ひらがな時課経抄』を作りました。翻訳は、明治十七年の『時課経』に基づいていますが、聖ニコライが改訂した新しい訳がある場合は改訂後の訳を採用しました。（聖詠経、明治三四年版『大斎奉事式第一週略』など）

この版では修道院以外であまり行われることのない夜半課と晩堂小課は省略しました。指示書きの部分は、Abridged Typikon, The Festal Menaiion (St. Tihon Seminary Press) なども参考に現代語に書き改めました。入力は札幌教会のグレゴリー長岡宏兄、大阪教会の故イヤコフ富賀見久兄のご奉仕によるものを使わせていただきました。

西日本主教区教務部

# 早 課

司 祭 我等の神は崇讃めらる、今も何時も世々に

誦 經 「アミン」。

我等の神や、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

天の王慰る者や、眞實の神在らざる所なき者満たざる所なき者や、萬善の寶藏なる者生命を賜ふの主や、來りて我等の中に居り我等を諸の穢より潔くせよ、至善者や我等の靈を救ひ給へ

【聖三祝文、至聖三者、天主經】

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。 三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、

聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。 三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦經 「アミン」。

主憐めよ。十二次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に「アミン」

來れ我等の王神に叩拜せん。叩拜一次

來れハリストス我等の王神に叩拜俯伏せん。叩拜一次

來れハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。叩拜一次

続いて、第十九、二十聖詠を靜嚴肅に読む。この間に司祭が宝座、聖堂内のイコンに炉儀を行う。

### 第十九聖詠

願はくは主は憂の日に於て爾に聽き、イヤコフの神の名は爾を扞ぎ衛らん。願はくは聖所より助を爾に遣し、シオンより爾を固めん。願わくは爾が悉くの獻物を記憶し、爾の燔祭を肥えたる物とせん。願はくは主は爾の心に循ひて爾に與へ、爾の謀る所を悉く遂げしめん。我等は爾の救を喜び、吾が神の名に依りて旌を揚げん。願はくは主は爾が悉くの願を成就せしめん。今我が其膏つけられし者を救ふを知れり、彼は聖天より其救の右の手の力を以て之に對ふ。或は車を以て、或は馬を以て誇る者あり。唯我等は主我が神の名を以て誇る。彼等は動きて顛れ、唯我等は起きて直く立つ。主よ、王を救へ、又我等が爾に呼ばん時、我等に聽き給へ。

## 第二十聖詠

主よ、王は爾の力を樂しみ、爾の救を歡ぶこと極なし。其心に望む所は、爾之を與へ、其口に求むる所は爾之を辭まざりき。蓋爾は仁慈の祝福を以て彼を逐へ、純金の冠を其首に冠らせり。彼生命を爾に求めしに、爾之に世世の壽を賜えり。彼の榮は爾の救を以て大なり、爾は尊榮と威嚴とを之に被らせたり。爾は彼に祝福を世世に賜ひ、爾が顔の歡にて彼を樂しませたり。蓋王は主を頼み、至上者の仁慈に因りて動かざらん。爾の手は爾が悉くの敵

を尋ね出し、爾の右の手は凡そ爾を憎む者を尋ね出さん。爾怒る時、彼等を火爐の如くなさん。主は其怒に於て彼等を滅し、火は彼等を噛まん。爾は彼等の果を地より絶ち、彼等の種を人の子の中より絶たん、蓋彼等は爾に向ひて悪事を企て、謀を設けたれども、之を遂ぐることに能わざりき。爾彼等を立てて的となし。爾の弓を以て矢を其面に發たん。主よ、爾の力を以て自ら擧れ、我等は爾の權能を歌頌讚榮せん。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

【聖三祝文、至聖三者、天主經】

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。  
至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、  
聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。 三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天

に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦經 「アミン」。

【トロバリ】

主よ、爾の民を救ひ、爾の業に福を降せ、我が國に福を与え、爾の十字架にて爾の住所を護り給へ。

光榮は父と子と聖神に歸す。

甘んじて十字架に擧げられしハリストス神よ、爾が同名の新なる住所に爾の恵を垂れ給へ、爾の力を以て「我が國を司る者を」樂しませ、其諸敵に勝たしめ給へ、彼は爾が和平の武器、勝たれぬ勝を以て其助とすればなり。

今も何時も世世に、「アミン」。

威嚴にして耻を得しめざる轉達、至善にして讚榮せらるる生神女よ、我等の祈禱を斥けず、正教の人の住所を固め、「我が國を司どるもの」を救ひて、天より勝利

を與へ給へ、獨恩寵に満たさるる者よ、爾神を生みたればなり。

【連禱】

司祭 神よ爾の大なる憐に因りて我等を憐め、爾に祈る、聆き納れて憐めよ。

詠隊 主憐めよ。三次

司祭 又吾が国の天皇及び国を司る者の爲に祈る。

司祭 又教會を司る〇〇の主教〇〇の爲に祈る。

司祭 又衆兄弟及び衆「ハリストイアニン」の爲に祈る。

司祭 蓋爾は仁慈にして人を愛する神なり、我等爾父と子と聖神に光榮を歸す、今

も何時も世世に。

詠隊 「アミン」。神父よ、主の名を以て祝讚せよ。

司祭 光榮は一性にして生命を施す分れざる聖三者に歸す、今も何時も世世に。

詠隊 「アミン」。

誦經者は謹んで次の【六段の聖詠】を誦する。会衆は神への畏怖の心を持つて靜かに聞く。

誦經 至高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人には惠臨めり。三次

主よ、我が唇を啓け、然せば我が口は爾の讚美を揚げんとす。二次

第三聖詠

主よ、我が敵は何ぞ多き、多くの者は我を攻む、多くの者は、我が靈を指して彼  
 は神より救を得ずと云ふ、然れども主よ、爾は我を衛る盾なり、我の榮なり。爾  
 は我が首を擧ぐ、我が聲を以て主に呼ぶに、主は其の聖山より、我に聽き給う。我臥  
 し眠り、又覺む、蓋主は我を扞ぎ衛ればなり。環りて我を攻むるの萬民は我懼る  
 るなし。主や起てよ、吾が神や、我を救ひ給え。爾は我が諸敵の頬を打ち、悪人  
 の齒を折けり。救は主に依る。爾の降福は爾の民に在り。  
 我臥し、寝ね、又覺む、主は我を扞ぎ衛ればなり。

第三十七聖詠

主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ、蓋爾  
 の矢は我に刺さり、爾の手は重く我に加わる。爾の怒に依りて我が肉に傷まざ  
 る所なく、我の罪に因りて我が骨は安きを得ず、蓋我が不法は我が首に溢れ、  
 重任の如く我を壓す、我の無智に依り我が傷腐れて且臭し。我屈まりて仆れんとし、  
 終日憂ひて行く、蓋我が腰は熱に悩まされ、我が肉に傷まざる所なし。我力衰  
 えて痛く憊れ、我が心の裂くるによりて號ぶ。主よ、我が悉くの願は爾の前  
 に在り、我が歎息は爾に隠るるなし。我が心は戦ひ栗き、我が力は我より脱け、

我が目の光も已に我にあるなし。我が朋と親しき者とは我が傷を見て離れ、我が親戚は遠ざかりて立つ。我が生命を覓むる者は網を設け、我を害わんと欲する者は我が滅亡のことを言いひて、毎日悪しき謀を圖む、然れども我は聾の如く聴かず、唾の如く己の口を啓かず、是に於て我は聞かなく、其口に答ふる所なき人の如くなれり、蓋主よ、我爾を恃む、主我が神よ、爾に聴き給はん。我言えり、願はくは敵は我に勝たざらん、我が足の跌く時、彼等は我に向ひて誇り高ぶる。我殆ど仆れんとす、我の憂は常に我が前に在り。我は我が不法を認め、我が罪の爲に甚哀しむ。我が敵は生きて愈強く、故なくして我を疾む者は益多し、悪を以て我の善に報ゆる者は、我が善に従ふに因りて我の敵となれり。主我が神よ、我を遣つる母れ、我に遠ざかる母れ、主我の救主よ、速に來たりて我を救ひ給へ。

### 第六十二聖詠

神よ、爾は我の神なり。我暁より爾に尋ぬ、我が靈は渴きて爾を望み、我が身は空しくして燥ける水なき地にありて、痛く爾を慕ふ、爾の能力と爾の光榮とを見ん爲なり、我が嘗て爾を聖所に觀しが如し、蓋爾の愛憐は生命に愈る。我が口爾を讚美せん。是くの如く我生ける時爾を崇め讚め、爾の名に依りて我が手を擧げん。我が靈の飽かざること脂油を以てするが如く、我が口歡の聲

にて爾を讚美す、榻にて爾を記憶し、夜更に爾を思ふ時に在り。蓋爾は私の扶助なり、爾が翼の蔭に於て我欣ばん、我が靈は親しく爾に付き、爾の右の手は我を扶く。彼の我が靈を害はんことを謀る者は地の深き處に降らん、彼等刃に櫻りて、狐の獲物とならん。惟王は神の爲に樂しまん、凡そ彼を以て誓う者は譽を得ん、蓋謊を言う者の口は塞がれんとす。

夜更に爾を思ふ、蓋爾は私の扶助なり、爾が翼の蔭に於て我欣ばん、我が靈は親しく爾に付き、爾の右の手は我を扶く。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

この時司祭は至聖所より出て、王門の前に立ち、早課祝文を黙誦。

### 第八十七聖詠

主我が救の神よ、我晝夜爾の前に呼ぶ、願はくは我が禱は爾が顔の前に至らん、爾の耳を我が願に傾けよ、蓋我が靈は苦難に飽き、我が生命は地獄に近づけり。我は墓に入る者と等しくなり、力なき人の如くなれり、死人の中に投げ

られて、猶殺されて柩に臥し、爾に復記憶せられず、爾の手より絶たれし者の如  
し。爾我を深き坎に、闇冥に、淵に置けり。爾の憤は重く我に加はり、爾の波  
を傾けて我を撃てり。爾我が識る所の者を我より遠ざけ、我を彼等の悪むべき者  
となせり、我閉されて出ざるを得ず。我が目は愁苦に因りて痛く疲れたり、主よ、  
我終日爾を呼び、手を伸べて爾に向へり。爾豈死せし者に奇跡を施さんや、死  
せし者豈起ちて爾を讃揚せんや、爾の憐は墓の中に、爾の眞は腐敗の地に、  
豈傳へられんや、爾の奇跡は闇冥に、爾の義は遺忘の地に、豈識られんや。主よ、  
我爾に呼ぶ、私の禱は晨に爾の前に在り。主よ、爾は何爲れぞ我が靈を棄  
て、爾の顔を我に隠し給ふ。我少きより禍に遭い、幾ど消え亡せんとし、爾  
の恐嚇を受けて我が疲は極れり。爾の憤は我を度り、爾の恐嚇は我を碎け  
り、毎水の如くに我を環り、齊しく集りて我を圍む。爾は我が友と親しき者と  
を我より遠ざけたり、我が識る所の者は見えぬ。  
主我が救の神よ、我晝夜爾の前に呼ぶ。  
願はくは我が禱は爾が顔の前に至らん、爾の耳を我が願に傾けよ。

第百二聖詠

我が靈よ、主を讃め揚げよ、我が中心よ、其聖なる名を讃め揚げよ。我が靈

よ、主を讃め揚げよ、彼が悉くの恩を忘るる母れ。彼は爾が諸の不法を赦し、  
爾が諸の疾を療す、爾の生命を墓より救ひ、憐と恵とを爾に冠らせ、幸福  
を爾の望に飽かしむ、爾が若復さるること驚の如し。主は凡そ迫害せらるる者  
の爲に義と審判とを行ふ。彼は己の途をモイセイに示し、己の作爲をイズライ  
リの諸子に示せり。主は宏慈にして矜恤、寛忍にして鴻恩なり、怒りて終あり、  
憤を永く懷かず。我が不法に因りて我等に行はず、我が罪に因りて我等に報い  
ず、蓋天の地より高きが如く、斯く主を畏るる者に於ける其憐は大なり、東  
の西より遠きが如く、斯く主は我が不法を我等より遠ざけたり、父の其子を憐む  
が如く、斯く主は彼を畏るる者を憐む。蓋彼は我が何より造られしを知り、我等  
の塵なるを記念す。人の日は草の如く、其榮ゆること田の華の如し。風之を過ぐれ  
ば無に歸し、其有りし處も亦之を識らず。唯主の憐は彼を畏るる者に世より世  
に至り、彼の義は其約を守り、其誠を懷ひて、之を行ふ子孫孫に及ばん。主  
は其實座を天に建て、其國は萬物を統べ治む。主の諸の天使、能力を具へ、其聲  
に遵ひて其言を行ふ者よ、主を讃め揚げよ。主の悉くの軍、其旨を行ふ役者  
よ、主を讃め揚げよ。主の悉くの造工よ、其一切治むる處に於て主を讃め揚げ  
よ。我が靈よ、主を讃め揚げよ。

其一切治むる處に於て、我が靈よ、主を讚め揚げよ。

第四百十二聖詠

主よ、我が禱を聆き、爾の眞實に依りて我が願に耳を傾けよ、爾の義に依りて我に聽き給へ。爾の僕と訟を爲す母れ、蓋凡そ生命ある者は、一も爾の前に義とせられざらん。敵は我が靈を逐ひ、我が生命を地に蹂り、我を久しく死せし者の如く暗に居らしむ、我が靈は我の衷に悶え、我が心は我の衷に曠しきが如し。我古の日を想ひ、凡そ爾の行ひしことを考へ、爾が手の工作を計る。我が手を伸べて爾に向ひ、我が靈は渴ける地の如く爾を慕ふ。主よ、速に我に聽き給へ、我が靈は衰へたり、爾の顔を我に隠す母れ、然からずば我は墓に入る者の如くならん。我に夙に爾の憐を聽かしめ給へ、我爾を頼めばなり。主よ、我に行くべき途を示し給へ、我が靈を爾に擧ぐればなり。主よ、我を我が敵より救ひ給へ、我爾に趨り附く。我に爾の旨を行ふを教へ給へ、爾は我の神なればなり、願はくは爾の善なる神は我を義の地に導かん。主よ、爾の名に依りて我を生かし給へ、爾の義に依りて我が靈を苦難より引き出し給へ、爾の憐を以て我が敵を滅し、凡そ我が靈を攻むる者を夷げ給へ、我は爾の僕なればなり。

主よ、爾の義に依りて我に聽き給へ、爾の僕と訟を爲す母れ。  
主よ、爾の義に依りて我に聽き給へ、爾の僕と訟を爲す母れ。  
願はくは爾の善なる神は我を義の地に導かん。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

### 【大連禱】

【主は神なり、トロパリ】本日のトロパリの調で「主は神なり」を歌う。

主は神なり、我等を照せり、主の名に依て來る者は崇讚めらる。

詠隊「主は神なり、我等を照らせり云々」

第一句 主を尊讚めよ、彼は仁慈にして其憐は世々にあればなり。

詠隊「主は神なり、我等を照らせり云々」

第二句 彼等我を圍み我を環れども我主の名を以て之を敗れり。

\* 「主は神なり：…」と第一句「主を尊み讚めよ：…」まで輔祭が読んで、その後詠隊が「主は神なり」を歌い、輔祭の句ごとに繰り返し、「工師が捨てし：…」のあと、「主は神なり」に続いてトロパリを歌う方法もある。いづれにせよ、計四回歌う。輔祭のことばに重ねて「主は神なり」を三回歌うのは十九世紀ロシアの「歌」を重視した習慣から。

詠隊「主は神なり、我等を照らせり云々」を歌ふ

第三句 我<sup>われ</sup>死<sup>し</sup>せず猶<sup>なほ</sup>生きて主<sup>しゅ</sup>の行<sup>おこな</sup>ふ所<sup>ところ</sup>を傳<sup>つた</sup>へん。

詠隊「主は神なり、我等を照らせり云々」を歌ふ

第四句 工師<sup>こうし</sup>が棄<sup>す</sup>てし所<sup>ところ</sup>の石<sup>いし</sup>は屋隅<sup>おくぐう</sup>の首石<sup>しゅせき</sup>となれり。此<sup>こ</sup>れ主<sup>しゅ</sup>のなす所<sup>ところ</sup>にして我<sup>われ</sup>等の目<sup>め</sup>に奇<sup>き</sup>異<sup>い</sup>なりとす。

続いて、本日の【祭のトロパリ】、【聖人のトロパリ】、主日の場合は【復活トロパリ】を2回、続いて同じ調の【生神女讃詞】

「ア Ril イヤ」を歌うように指定されている日、あるいは大斎平日には「主は神なり」の代わりに、その日の調で「ア Ril イヤ」を3回歌う。そのとき以下の句を誦する。

第一句 我、夜中我が靈<sup>なんじ</sup>にて、爾<sup>なんじ</sup>を慕<sup>した</sup>へり、晨より我が中心にて爾を尋ねん。

第二句 蓋、爾が審判の地に行わるる時、世に居るものは義を学<sup>ま</sup>ぶ<sup>は</sup>。

第三句 爾の民を憎む者は辱<sup>は</sup>を承<sup>ま</sup>げん<sup>は</sup>。

第四句 主<sup>しゅ</sup>よ、爾已に民を増し、己の光榮を顕せり。

続いてその日の調の【聖三讃詞】を1回ずつ歌う。(八調経巻末参照)

\* スラブ語祈禱書および『連接歌集』では第一句 神よ、我が神は夜中より、爾を慕ふ、蓋爾の誠めは地に在りてなり。第二句 地に居る者は義を學べ。第三句 火は爾の敵を嚙ん\*。第四句 主よ、彼らに艱難を加へ、地の驕れる者に艱難を加へよ。(イサイヤ26:9-19による)。

\* (☆イサイヤ26:11だが、日本語訳では句の前半「嫉妬は教えられぬ民を掴む」が欠落)

続いて、聖詠經からその日のカフィズマを読み、続いて【坐誦讃詞】<sup>セダレン</sup>を読む。

★主日、大祭日にはポリエレイ、讃歌、復活のエフロギタリヤ（「主や爾は崇め讃めらるる」、小連禱、アンティフォン、ポロキメン、福音の読み、福音後のステイヒラなど

第五十聖詠（「主よ爾の民を救い」と「主憐れめよ」十二回）、

### 【カノン】

規程の第九歌頌の前に、【至聖生神女の歌詠】（我が心は主を崇め）を歌う。★大祭日、復活祭期は歌わない。

輔祭 生神女 光の母を讃歌を以て讃揚げん。

詠隊 我が心は主を崇め、我が靈は神我が救主を喜ぶ。

其婢の卑微を顧み給へり、今より萬世我を福なりと謂はん。

權能を有ち給へる者は我が爲に大なる事を成せり其名は聖なり、其憐は世々彼を畏るる者に臨まん。

其臂の力を顯はして心の驕れる者を散らし給へり。

權ある者を位より黜け、卑微き者を陞げ、饑うる者を善に飽かせ、富める者を空く返らせ給へり。

其僕イズライリを納れて我が先祖に告げしが如くアウラムと其裔を世々に憐む

ことを記憶し給へり。

上記の句ごとに以下の讃歌を附唱として繰り返して歌う。

ヘルワイムより尊くセラフイムに並びなく榮え、貞操を壊らずして神言を生みし  
實の生神女たる爾を崇め讃む。

続いて規程の第九歌頌を歌う。

主日以外は、規程の終了後、次の讃歌を歌ふ。

常に福にして全く玷なき生神女、吾が神の母なる爾を福なりと稱ふる  
は眞に當れり、ヘルワイムより尊くセラフイムに並びなく榮え、貞操を壊  
らずして神言を生みし實の生神女たる爾を崇め讃む。

★主日またはポリエレイのある祭日の場合、第九歌頌の後ただちに小連続。(ラザリのスポタ、及び聖大土曜日も同様。  
ただし聖枝主日、五旬祭、他の主宰の祭日が日曜日に重なる場合は含まない)  
続いて【主は我等の神は聖なり】

主我等の神は聖なり。詠隊は「主我等の神は聖なり」を繰り返す。

第一句 主はシオンに於て大なり。詠隊「主我等の神は聖なり」

第二句 主は高く衆民の上に在り。詠隊「主我等の神は聖なり」

【差遣詞】(または光耀歌)  
エクスポーズテイラリ  
スウェチーレン

【讚揚歌】  
フバリーチヌイ

主日または主幸の祭日または【大詠頌】を歌う指定のある聖人の祭日には指定された調で、【讚揚歌】を「凡そ呼吸あるもの」から歌う。

凡そ呼吸ある者は主を讚揚げよ。

天より主を讚揚げよ、至高きに彼を讚揚げよ。

讚歌は爾神に歸す。 ※

他の日には「天より主を讚め揚げよ」から以下の通り。

天より主を讚揚げよ。

讚歌は爾神に歸す。

#### 第四百四十八聖詠

天より主を讚揚げよ、至高きに彼を讚揚げよ。

讚歌は爾神に歸す。

※

其そのことごと悉てんくの天使てんよ、彼かれを讚ほめ揚あげよ、其そのことごと悉ぐんくの軍ぐんよ、彼かれを讚ほめ揚あげよ、讚ほめうた歌なんじかみは爾なんじかみ神かみに歸きす。日ひと月つきよ、彼かれを讚ほめ揚あげよ、悉ことごとくの光ひかる星ほしよ、彼かれを讚ほめ揚あげよ。諸てん天てんの天てんと天てんより上うえなる水みずよ、彼かれを讚ほめ揚あげよ。主しゅの名なを讚ほめ揚あぐべし、蓋けだし彼かれ言いひたれば、  
即すなわち成なり、命めいじたれば、即すなわち造つくられたり、彼かれは之これを立たてて世よ世よに至いたらしめ、則のりを與あたへて之これを躓こえざらしめん。地ちより主しゅを讚ほめ揚あげよ、大おお魚うおと悉ことごとくの淵ふち、火ひと霰あられ、雪ゆきと霧きり、主しゅの言ことばに從したがふ暴ぼう風ふう、山やまと悉ことごとくの陵おか、果くだものの樹きと悉ことごとくの柏はくこう香こう木ぼく、野や獸じゅうと  
諸もろの家か畜ちく、匍はふ物ものと飛とぶ鳥とり、地ちの諸しよ王おうと萬ばん民みん、牧ぼく伯はくと地ちの諸しよ有ゆう司し、少しょう年ねんと處しよ女じよ、翁おきなと童わらべは、主しゅの名なを讚ほめ揚あぐべし、蓋けだし惟ただ其その名なは高たかく擧あげられ、其その光こう榮えいは天てん地ちに徧あまねし。彼かれは其その民たみの角つのかを高たかくし、其その諸しよ聖せい人じん、伊いズライリらの諸しよ子し、彼かれに親したしき民たみの榮さかえを高たかくせり。

第四百四十九聖詠

新あらたたなる歌うたを主しゅに歌うたえよ、其その讚さん美びは聖せい者しやの會かいに在あり。伊いズライリらは己おのれの造ぞう成せい主しゅの爲ために樂たのむべし、シオンしよんの諸しよ子しは己おのれの王おうの爲ために喜よろこぶべし。舞まいを以もつて彼かれの名なを讚ほめ揚あげ、鼓つづみと琴ことを以もつて彼かれに歌うたふべし、蓋けだし主しゅは其その民たみを恵めぐみ、救すくひを以もつて謙けん卑ひの者ものを榮さかえしむ。諸しよ聖せい人じんは光こう榮えいに在ありて祝いわひ、其その榻とこに在ありて歡よろこぶべし。其その口くちには神かみの讚さん榮えいあり、其その手てには兩もろ刃はの劍つるぎあるべし、仇あだを諸しよ民みんに報むくい、罰ばつを諸しよ族ぞくに行おこなひ、其その諸しよ王おうを索なわ

にて縛り、其諸侯を鐵の鎖にて繋ぎ、彼等の爲に記されし審判を行はん為なり。斯の栄えは其 悉の聖人に在り。

第百五十聖詠

神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃揚げよ。

ステイヒラ6句たてて、とある場合はここから挿入する(★注：ステイヒラの数に応じて、後ろから帳尻あわせをする。)

其權能に依て彼を讃揚げよ、其至と嚴かなるに依て彼を讃揚げよ。

角の聲を以て彼を讃揚げよ、琴と瑟を以て彼を讃揚げよ。

鼓と舞を以て彼を讃揚げよ、絃と簫を以て彼を讃揚げよ。

和聲の鈸を以て彼を讃揚げよ、大聲の鈸を以て彼を讃揚げよ。

凡そ呼吸ある者は主を讃揚げよ。

⑥ ④

主日にはステイヒラの後「光榮は」に続いて【福音ステイヒラ】を誦し(八調經の卷末参照)、「今も」に続いて【生神女讚詞】を

以下の通りに歌う。

生神童貞女や、爾は至て讚美たる者なり、爾に身を取りし主は地獄を擲にし、  
アダムを呼び起し、詛ひを壊り、エワを釋し、死を亡し、我等を生かせり、故に我等歌  
ふて呼ぶ、此く行ひ給ひしハリストス神は崇め讚めらる、光榮は爾に歸す。

司祭 光榮は爾我等に光を顯しし主に歸す。

【大詠頌】

詠隊至高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人には恵臨めり。主天の王、神父  
全能者よ、主獨生の子イイススハリストス、及び聖神よ、爾の大なる光榮に因り  
て、我等爾を崇め、爾を讚め揚げ、爾を伏し拜み、爾を尊み歌ひ、爾に感謝  
す。主神よ、神の羔、父の子、世の罪を任ひし者よ、我等を憐み給へ、世の諸  
の罪を任ひし者よ、我等の禱を納れ給へ。父の右に坐する者よ、我等を憐み給へ。  
爾は獨聖なり、爾は獨主イイススハリストス、神父の光榮を顯す者なればな  
り、「アミン」。

我日日に爾を讚め揚げ、爾の名を世世に崇め歌はん。  
主よ、我等を守り、罪なくして此の日を度らせ給へ。主我が先祖の神よ、爾は崇

め讃められ、爾の名は世世に尊み歌はる、「アミン」。

主よ、爾を恃むに因りて、爾の憐を我等に垂れ給へ。

主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に訓へ給へ。三次

主よ、爾は世世我等の避所たり。我曾て言へり、主よ、我を憐み、我が靈を醫

し給へ、我罪を爾に得たればなり。

主よ、爾に趨り付く、爾の旨を行ふを我に教へ給へ、爾は我の神、生命の源

は爾に在ればなり、我等爾の光に於て光を觀ん。憐を爾を知る者に恒に垂

れ給へ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。「アミン」。

聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

朗聲 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者や、我等を憐めよ。

大詠頌終了後、本日の【発放トロパリ(アポリティキオン)】及び【生神女讃詞】。

★主日には主日の【定規のトロパリ】

第一、三、五、七の調の主日には

今救は世界に及べり。我等墓より復活せし吾が生命の首なる主に歌ふ、其死にて死を滅し、我等に勝利と大なる慈憐とを賜へばなり。

第二、四、六、八の調の主日には

主よ、爾は墓より復活して、地獄の鎖を壊り、死の定罪を滅し、衆人を敵の網より救へり。獨大慈憐なる者よ、爾は使徒に現れて、彼等を傳教に遣し、彼等に因りて爾の平安を世界に賜へり。

★主日、大祭日には【重連禱】【増連禱】早課の終わりのやりとりへ

大齋、または【大詠頌】を歌わない日には、【讃揚歌】の後以下の通り。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

主我等の神よ、光榮は爾に歸す、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も

何時も世世に、「アミン」。

光榮は爾我等に光を顯しし主に歸す。

至高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人には恵臨めり。主天の王神父

全能者よ、主獨生の子イイススハリストス、及び聖神よ、爾の大なる光榮

に因りて、我等爾を崇め、爾を讚め揚げ、爾を伏し拜み、爾を尊み歌ひ、

爾に感謝す。主神よ、神の羔、父の子、世の罪を任ひし者よ、我等を憐

み給へ、世の諸の罪を任ひし者よ、我等の禱を納れ給へ。父の右に坐する者よ、我等を憐み給へ。爾は獨聖なり、爾は獨主イイススハリストス、神父の光榮を顯す者なればなり、「アミン」。

我日に爾を讚め揚げ、爾の名を世世に崇め歌はん。

主よ、爾は世世我等の避所たり。

我曾て言へり、主よ、我を憐み、我が靈を醫し給へ、我罪を爾に得たればなり。主よ、爾に趨り附く、爾の旨を行ふを我に教へ給へ、爾は我の神、生命の源は爾に在ればなり、我等爾の光に於て光を觀ん。憐を爾を知る者に恒に垂れ給へ。

続いて

主よ、我等を守り、罪なくして此の日を度らせ給へ。主吾が先祖の神よ、爾は崇め讚められ、爾の名は世世に尊み歌はる、「アミン」。

主よ、爾を恃むに因りて、爾の憐を我等に垂れ給へ。主よ爾は崇め讚めらる、爾の誠を我に訓へ給へ。主宰よ、爾は崇め讚めらる、爾の誠を我に悟らせ給へ。聖なる者よ、爾は崇め讚めらる、爾の誠にて我を照し給へ。

主よ、爾の憐は世世に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿れ。讚は爾に歸し、歌は爾に歸し、光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

【増連禱】

輔祭 我等の朝の禱を増して主に 献らん：

祭日以外の場合、八調經から【挿句讚頌】を誦する。平日の場合ステイヒラの後に加する句は以下の通り。

第一句 主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂しまん。爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂しましめ給へ。願はくは爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

第二句 願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作进行を我等に助け給へ、我が手の工作进行を助け給へ。

「光榮」今もに続くステイヒラが記載されている場合は指示に従って誦し、続いて以下の通り「至上者よ」に続く。

至上者よ、主を讚榮し、爾の名に歌ひ、爾の憐を朝に宣べ、爾の眞を夜

に宣ぶるは美なる哉。

【聖三祝文、至聖三者、天主經】

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆

を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨

は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給

へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘

に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦經 「アミン」。

【讚詞】

生神女、天の門よ、我等爾が光榮の堂に立つに、意は天に立つが如し、祈

る、我等の爲に爾が憐の門を開き給へ。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

ヘルワイムより尊く、セラワイムに並なく榮え、貞操を壞らずして神言を生みし實の生神女たる爾を崇め讃む。

神父よ、主の名を以て祝讃せよ。

司祭 永在の主ハリストス我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、

「アミン」。

誦經 天の王よ、我が国に福を与え、正教を固め、異教を順はせ、世界を穩にし、克く此の聖堂を護り、已に過ぎ去りし我等の諸父兄弟を義人の住居に置き、並に我等の痛悔と承認とを納れ給へ、爾は仁慈にして人を愛する主なればなり。

嗣ぎて司祭聖エフレムの祝文を誦す、

主吾が生命の主宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に與ふる勿れ。

叩拜一次

貞操と、謙遜と、忍耐と、愛の情を我爾の僕に與へ給へ。叩拜一次

嗚呼主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざるを賜へ、蓋爾は世世に崇め讃めらる、「アミン」。叩拜一次

又躬拜すること十二次、毎次黙誦して曰く、

神よ、我罪人を浄め給へ。

又誦す、

主吾が生命の主宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に與ふる勿れ。貞潔と、謙遜と、忍耐と、愛の情を我爾の僕に與へ給へ。

嗚呼主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざるを賜へ、蓋爾は世世に崇め讃めらる、「アミン」。叩拜一次

# 第一時課

來れ、我等の王・神に叩拜せん。

來れ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。

來れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

## 第五聖詠

主よ、我が言を聴き、我が思を悟れ。我が王我が神よ、我が呼ぶ聲を聴き納れ給へ、我爾に祈ればなり。主よ、晨に我が聲を聴き給へ、我晨に爾の前に立ちて待たん。蓋爾は不法を喜ばざる神なり、悪人は爾に居るを得ず、不虔の者は爾が目の前に止まらざらん、爾は凡そ不法を行ふ者を憎む、爾は謊を言ふ者を滅さん、残忍詭譎の者は主之を惡む。惟我爾が憐の多きに倚りて爾の家に入り、爾を畏れて爾が聖堂に伏拜せん。主よ、我が敵の爲に我を爾の義に導き、我が前に爾の道を平にせよ。蓋彼等の口には眞實なく、彼等の心は惡逆、彼等の喉は開けたる枢、其舌にて媚び諂ふ。神よ、彼等の罪を定め、彼等をして其謀を以て自ら敗れしめ、彼等が不虔の甚しきに依りて之を逐い給へ、彼等爾に逆らえばなり。凡そ爾を頼む者は喜びて永く樂しみ、爾は彼等を庇ひ護らん、

爾なんじの名なを愛あいする者ものは爾なんじを以もつて自みずから詔ほこらんとす。蓋けだししゅ主よよ、爾なんじは義ぎじん人にに福ふくを降くだし、  
恵めぐみを以もつて盾たての如ごとく彼かれを環めぐらし衛まもればなり。

第八十九聖詠

主しゅよ、爾なんじは世よよ世われらに我等かくれがの避か所たりたり。山やまいま未しやうだ生せぜず、爾なんじ未ちだ地ぜんと全せかい世界とを造つくら  
ざる先さき、且かつよ世よより世よまでも爾なんじは神かみなり。爾なんじ人ひとを塵ちりに歸かえらしめて曰いう、人ひとの子こよ、歸かえ  
れと。蓋けだしなんじ爾めが目まえの前まえには、千せんねん年は過すぎし昨日さくじつの如ごとく、夜やかん間の更こうの如ごとく。爾なんじは大おおみず水ず  
の如ごとく彼かれら等らを流ながす、彼かれら等らは夢ゆめの如ごとく、朝あさに生おふる草くさの如ごとく、朝あさには花はなさきて且かつあお青おし、  
暮くれには刈かられて稿かる。蓋けだしわれら我等なんじは爾いかりの怒いかりに因よりて消きえ、爾なんじの憤いきどおりに因よりて惶おそれ惑まど  
ふ。爾なんじは我等われらの不法ふほうを爾まえの前まえに置おき、我等われらの隠かくれたる事ことを爾なんじが顔かんばんせの光ひかりの前まえに  
置おけり。我等われらが悉ことごとくの日ひは爾なんじが怒いかりの中うちに過すぎ、我等われらは我わが年としを失うしなふこと音おとの如ごと  
し。我わが年としの數かずは七しちじゅうねん十年あるい、或すこやかは健すこやかなれば八はちじゅうねん十年なり、其そのあいだ間の壯さかんなる時ときも、劬くろう勞らう  
と疾やまい病びあり、蓋けだしそのす其すみやか過おぐる事こと速すみやかにして、我われら等と飛とび去さる。誰たれか爾なんじが怒いかりの力ちからを知し  
り、又またなんじ爾おそを畏おそる度ほどに依よりて爾なんじの憤いきどおりを識しらん。願ねがはくは我等われらに我わが日ひを算かぞふ  
ることを教おしへて、智ちえ慧こころの心こころを獲えしめ給たまへ。主しゅよ、面おもてを回かえせ、何いずれの時ときに至いたるか、爾なんじ  
の僕ぼくを憐あわれみ給たまへ。夙つとに爾なんじの憐あわれみを以もつて我等われらに飽あかしめよ、然しかせば我等われら生涯しやうが歡よろこび  
樂たのしまん。爾なんじ我等われらを撲うちし日ひ、我われら等が禍わざわいに遭あひし年としに代かえて、我われら等を樂たのしまし

め給へ。願はくは爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん、願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作を我等に助け給へ、我が手の工作を助け給へ。

第百聖詠

我憐と審判とを歌はん、主よ、爾に歌を奉らん。我玷なき道を思はん、爾何の時我に至るか、我玷なき心を以て我が家の中を行かん。我が目の前には邪なる物を置かざらん、法に背く行は我之を疾む、其れ必我に附かざらん。壊れし心は我に遠ざかり、悪しき者は我之を識らざらん。隱に己の隣を謗る者は我之を逐ひ、目傲り、心高ぶる者は我之を容れざらん。我が目は斯の地の忠信なる者を顧みて、彼等を我が傍に居らしめん、玷なき道を行く者は我に事えん。貳心を行ふ者は我が家に居るを得ず、謊を言ふ者は我が目の前に止まらざらん。晨に我此の地の悉くの不虔者を滅して、凡そ不法を行ふ者を主の城邑より絶たれしめん。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

主憐めよ。三次

早課で「主は神なり我等を照せり」を歌う時は「光榮は」に続いて、「本日トロパリ」「今も」、「※嗚呼恩寵に満たさるる者や」

光榮は父と子と聖神に歸す、

【本日トロパリ】

★早課で「主は神なり」の代わりに「アリュイヤ」が指定されている日には、以下のトロパリを歌う。第六の調。

吾が王吾が神や、晨に我が聲を聴き給へ。

第一句 主や、我が言を聴き我が思を悟れよ。

第二句 主や、我爾に禱ればなり。

光榮は父と子と聖神に歸す。今も何時も世々に。「アミン」。

今も何時も世世に、「アミン」。

【生神女讃詞】

嗚呼恩寵に満たさるる者よ、我等何を以て爾を稱せんか、天とせん、爾義の日を照したればなり、樂園とせん、爾枯れざる花を開きたればなり、童貞女とせん、爾貞操を壊らざればなり、淨き母とせん、爾聖なる懐に萬物の神たる子を抱きたればなり、彼に我等の靈の救はれんことを祈り給へ。

★齋時に歌う方法は三歌齋經に掲載。

我が足を爾の言に固め給へ、諸の不法の我を制するを許す母れ。我を人の迫害より救ひ給へ、然せば我爾の命を守らん。爾が顔の光にて爾の僕を照し、爾の律を我に誨へ給へ。主よ、願はくは我が口は讚美に満てられて、我爾の光榮を歌ひ、日に爾の威嚴を歌はん。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

「アミン」

★大斎以外の時は、本日記憶せられる聖人または祭日の【コンダク（小讃詞）】を読む。

★大斎、または当日のコンダク（小讃詞）がないときは、以下の【生神女讃詞】を誦する。

月火木曜日には

誦經 我等われら黙もださず心こころと口くちにて聖せいなる天使てんしよりも聖せいにして、至いたりて光榮こうえいなる神かみの母ははを歌うたひ、之これを承うけ認みとめて生神女しょうしんじよと爲なす、其實そのじつに人體じんたいを取とりし神かみを生うみて、恒つねに我等われらの靈たましいの爲ために禱いのり給たまへばなり。

水金曜日には

ハリストス吾わが神かみよ、疾とく先さきんじて、爾なんじを誹そしり、我等われらを阻はばめる敵てきの我等われらを擧とりこにするを許ゆるす勿なかれ、獨ひとり人を愛あいする主しゅよ、生神女しょうしんじよの祈きとうに依よりて、爾なんじの十字架じゅうじかを以もつて、我等われらと戰たたかふ敵てきを亡ほろぼし、彼等かれらに正教せいきょうの者ものの信しんが如何いかなる能ちからあるを悟さとらしめ給たまへ。

スボタには

主しゅや、全世界ぜんせかいは捧神ほうしんなる致命者ちめいしやを萬物ばんぶつの初實はつものとして、爾なんじ萬物ばんぶつを植うえ附つけし者ものに

奉る大仁慈なる者や、彼等と生神女の祈祷に依て爾の住所なる爾の教會を深き平安に守り給へ。

主憐めよ。四十次

何の日何の時に、天にも地にも叩拜讚榮せられ、寛忍、鴻慈、至善にして、義人を愛し、罪人を憐み、來世の福を約して、萬の者を救に招くハリストス神よ、爾主よ、親ら我が此の時の禱をも受け、我等の生命を爾の誠に向はしめ給へ、我等の靈を聖にし、體を潔くし、慮を直くし、思を淨くし、我等を悉くの憂と禍と疾より救ひ、爾の聖なる天使を以て我等を環り、我等が其圍に衛り導かれて、信の一なると爾の近づき難き光榮を悟るに至らせ給へ、蓋爾は世世に崇め讚めらる、「アミン」。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

ヘルワイムより尊く、セラフイムに並なく榮え、貞操を壞らずして神言を生みし實の生神女たる爾を崇め讚む。

神父よ、主の名を以て福を降せ。

司祭 神よ、我等に恩を被らし、我等に福を降し、爾が顔を以て我等を照し、並に我等を憐み給へ。

誦經 「アミン」。

大齋には聖エフレムの「主吾が生命の主宰や云々」の祝文を誦するたび叩拜。躬拜十二回、終了後祝文三段を連誦して叩拜。一次

祝文

司祭 眞の光なるハリストス、凡そ世に来る人を照し且聖にする者よ、願はくは爾が顔の光は我等に輝き、我等は是に依りて近づき難き光を見るを得ん、願はくは爾が至浄の母と、爾が諸聖人の祈祷に因りて、我等の足を爾の戒を行ふに向はしめ給へ、「アミン」。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に「アミン」。

主憐めよ。三次 福を降せ

司祭發放詞

【生神女コンダク】

生神女よ、我等爾の僕婢は禍より援けられしを以て、爾克く勝つ将帥に凱歌

と感謝かんしゃとを奉たてまつる、勝かたれぬ權能ちからを有たもつに依よりて、我等われらを諸もろもろの苦難くなんより救すくひ、爾なんじ  
を歌うたひて嫁よめならぬ嫁よめよ、慶よろこべと呼よばしめ給たまへ。

### 第三時課

司祭 我等の神は崇讃らる、今も何時も世々に。

誦經 「アミン」

我等の神や、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

天の王慰る者や、眞實の神在らざる所なき者や、萬善の寶藏なる者生命を賜ふの主や、來りて我等の中に居り我等を諸の穢より潔くせよ、至善者や我等の靈を救ひ給へ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者や、我等を憐めよ。 三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に「アミン」。

至聖三者や我等を憐めよ、主や我等の罪を潔くせよ、主宰や、我等の愆を赦せ、聖なる者や臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す。今も何時も世々に「アミン」。

天に在す我等の父や、願は爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行るるが如く地にも行はれん。我が日用の糧を今日我等に與へ給え。我等に

債ある者を我等免すが如く我等の債を免し給へ。我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋國と権能と光榮は爾に世々に歸す。

誦經 「アミン」。

主憐めよ。 十二次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。「アミン」。

※一時課から続けて行う場合は、ここから

來れ我等の王神に叩拜せん。 叩拜一次

來れハリストス我等の王神に叩拜俯伏せん。 叩拜一次

來れハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。 叩拜一次

### 第十六聖詠

主よ、私の直を聴き、私の呼ぶを聆き納れ、偽なき口より出づる禱を受け給へ。願はくは我を糺す判は爾の顔より出で、爾の目は義に注がん。爾は已に我が心を験し、夜中に臨み、我を試みて得たる所なし、我が口は私の思に離れず、人の行爲に於ては、我爾が口の言に循ひて、迫害者の途を慎めり。我が歩を爾

の路に固めよ、我が足の蹶かざらん爲なり。神よ、我爾に籲ぶ、蓋爾我に聽か  
ん。爾の耳を我に傾けて、我が言を聆き給え。爾を頼む者を爾の右の手に敵  
する者より救ふの主よ、爾の妙なる憐を顯し給へ。我を眸子の如く護れ、爾  
が翼の蔭を以て、我を攻むる不虔者の面、我を環る我が靈の敵より我を覆ひ給  
え。彼等は己の脂に包まれ、己の口にて高ぶり言う。今我が歩む度に我等を環  
り、目に狙ひて、地に顛さんと欲す。彼等は獲物を貪る獅の如く、隠なる處に蹲  
る小獅の如し。主よ、起きよ、彼等に先だちて彼等を殪し、爾の劍を以て我が靈  
を不虔者より救へ、主よ、爾の手を以て人即世の人より救ひ給へ。彼等の業は  
今生にあり、爾は爾の寶藏より其腹を充たし、彼等の子は壓きて、餘を其裔に残  
さん。惟我は義を以て爾の顔を見んとす、覺め起きて爾の容を以て自ら壓き  
足らん。

## 第二十四聖詠

主よ、爾に我が靈を擧ぐ。吾が神よ、爾を待む、我に世世愧なからしめよ、我が敵  
を我に勝ちて喜ばしむる母れ。凡そ爾を待む者にも愧なからしめ給へ、妄りに法  
を犯す者は願はくは愧を得ん。主よ、我に爾の道を示し、我に爾の道を訓えよ。我  
を爾の眞理に導きて、我を訓へ給へ、蓋爾は我が救の神なり、我日に爾を恃

めり。主よ、爾の鴻恩と爾の慈憐とを記憶せよ、蓋是れ永遠よりあるなり。我が少  
き時の罪と過とを記憶する母れ、主よ、爾の仁慈に依り、爾の慈憐を以て、我  
を記憶せよ。主は仁なり、義なり、故に罪人に道を訓へ示す、謙遜の者を義に導  
き、謙遜の者に己の道を教ふ。凡そ主の道は其約と其啓示とを守る者に在りて慈憐  
なり、眞實なり。主よ爾の名に因りて我が罪を許し給へ、其大なるを以てなり。誰  
か主を畏るる人たる、主は之に擇ぶべき道を示さん。彼の靈は福に居り、彼の裔  
は地を嗣がん。主の奥義は彼を畏るる者に属し、彼は其約を以て之に顯す。我が  
目常に主を仰ぐ、其我が足を網より出すに因る。我を顧み、我を憐め、我獨に  
して苦めらるるに因る。我が心の憂益多し、我が苦難より我を引き出せ、  
我が困苦、我が勞瘁を顧み、我が諸の罪を赦し給へ。我が敵を觀よ、何ぞ多き、  
彼等が我を怨む恨みは何ぞ甚しき。我が靈を護りて我を救ひ、我が爾に於け  
る恃に愧なからしめ給へ。願はくは無玷と義とは我を護らん、我爾を恃めばなり。  
神よ、イズライリを其諸の憂より救ひ給へ。

第五十聖詠

神よ、爾の大なる憐に因りて我を憐み、爾が恵の多きに因りて我の不法を抹  
し給へ。屢我を我が不法より洗ひ、我を我が罪より清め給へ、蓋我は我が不法

を知る、われの罪は常に我が前に在り。われは爾獨爾に罪を犯し、悪を爾の目の前に行へり、爾は爾の審断に義にして、爾の裁判に公なり。視よ、われは不法に於て生まれ、我が母は罪に於て我を生めり。視よ、爾は心に眞實のあるを愛し、我が衷に於て智慧を我に顯せり。「イツツプ」を以て我に沃げ、然せば我潔くならん、我を滌へ、然せば我雪より白くならん。我に喜と樂とを聞かせ給へ、然せば爾に折られし骨は悦ばん。爾の顔を我が罪より避け、我が盡くの不法を抹し給へ。神よ、潔き心を我に造れ、正しき靈を我の衷に改め給へ。我を爾の顔より逐ふこと母れ、爾の聖神を我より取り上ぐること母れ。爾が救の喜を我に還せ、主宰たる神を以て我を固め給へ。我不法の者に爾の道を教へん、不虔の者は爾に歸らんとす。神よ、我が救の神よ、我を血より救ひ給へ、然せば我が舌は爾の義を讃め揚げん。主よ、我が唇を啓け、然せば我が口は爾の讚美を揚げん、蓋爾は祭を欲せず、欲すれば我之を獻らん、爾は燔祭を喜ばず。神に喜ばるる祭は痛悔の靈なり、痛悔して謙遜なる心は、神よ、爾輕んじ給はず。主よ、爾の恵に因りて恩をシオンに垂れ、イエルサリムの城垣を建て給へ。其時に爾義の祭、獻物と燔祭とを喜び饗けん、其時に人人爾の祭壇に犢を奠へんとす。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次  
主憐めよ。三次

★早課で【主は神なり我等を照せり】を歌う時は、「光榮は【本日トロパリ】」今も【生神女や爾は実の】

光榮は父と子と聖神に歸す、

【本日トロパリ】

早課で「主は神なり」の代わりに「アリルイヤ」が指定されているときは、以下のトロパリを歌う。第六の調。

第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣はしし至善の主や、之を我等より取上ぐる事勿れ。尚我等爾に祈る者の衷に之を新にせよ。

第一句 神や清潔き心を我に造り正直き靈を我の衷に改め給へ。

第二句 我を爾の顔より逐ふ事勿れ。爾の聖神を我より取上ぐる事勿れ。

毎句の後「第三時に爾の至聖神云々」を歌う。歌う毎に叩拜一次。

光榮は父と子と聖神に歸す。

※今も何時も世々に。「アミン」。

【生神女讃詞】

生神女よ、爾は實の葡萄の枝、我等の爲に生命の果を結びし者なり、女宰よ、爾に祈る、聖使徒と共に我が靈の憐を蒙らんことを祈り給へ。  
主は日に崇め讃めらる。神は我等に重荷を負はずれども、亦我等を救ひ給ふ。神は我等の爲に救の神なり。

【聖三祝文、至聖三者、天主經】

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、

聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に

債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦經 「アミン」。

本日の聖人、または祭日の【コンダク(小讚詞)】

★大齋の時は第八の調によつて以下のトロバリを誦する。

崇め讚めらるる哉ハリストス我等の神よ、爾は漁者に聖神を遣して智者と爲し、彼等を以て世界を漁し得たり。人を愛する主よ、光榮は爾に歸す。

光榮は父と子と聖神に歸す。

イイススよ、我等の靈の悶ゆる時、速にして眞なる慰を爾の諸僕に與へ給へ、憂の時我等の靈を離るる母れ、禍の時我等の心に遠ざかる勿れ、恒に我等を衛り給へ。我等に近づけ、在らざる所なき者よ、近づけよ、めぐみひろきもの、常に爾の使徒と偕に在るが如く、我等爾を恃む者と偕にし、我等に同一にして爾を歌ひ、爾が至聖の神を讚榮せしめ給へ。

今も何時も世世に、「アミン」。

至浄なる生神女よ、爾は「ハリスティアニン」等の憑侍と轉達なり、避所と壞れざる城なり、弱れる者の爲に風なき湊なり、讚榮せらるる童貞女よ、爾は息めざる祈禱にて世を救ふ者なるを以て、我等をも記憶し給へ。

主憐めよ。四十次

何の日何の時にも、天にも地にも叩拜讚榮せられ、寛忍、鴻慈、至善にして、義人を愛し、罪人を憐み、來世の福を約して、萬の者を救に招くハリストス神よ、爾主よ、親ら我が此の時の禱をも受け、我等の生命を爾の誠に向はしめ給へ、我等の靈を聖にし、體を潔くし、慮を直くし、思を淨くし、我等を悉くの憂と禍と疾より救ひ、爾の聖なる天使を以て我等を環り、我等が其圍に衛り導かれて、信の一なると爾の近づき難き光榮を悟るに至らせ給へ、蓋爾は世世に崇め讚めらる、「アミン」。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

ヘルワイムより尊く、セラフイムに並なく榮え、貞操を壞らずして神言を生み

し實じつの生神女しょうしんじよたる爾なんじを崇め讃むあがほ。

神父しんぶよ、主しゆの名なを以て福ふくを降せくだ。

司祭しゆ 主しゆイイススハリストス我等われらの神かみや、吾わが諸聖しよせい神父しんぶの祈禱きとうに依よりて我等われらを憐めよあわれ。  
「アミン」。

★大齋には【聖エフレムの祝文】を誦し叩拜。一時課参照。

続いて【聖マルダリイの祝文】

誦經 主宰しゆさい神父かみ全能者かみちぜん、主しゆ獨生どくせいの子こイイススハリストス、及びおよ聖神せいしん、惟一ゆいいちの神性しんせい、惟一ゆいいち

の能力のうりよくよ、我罪人われざいにんを憐みあわれ、爾なんじが知る所しるところの法ほうを以て我われ不當ふとうの僕ぼくを救すくひ給たまへ、蓋爾けだしなんじ  
は世世よよに崇め讃めらる、  
「アミン」。

第六時課

來れ、我等の王・神に叩拜せん。  
來れ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。  
來れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

第五十三聖詠

神よ、爾の名を以て我を救ひ、爾の力を以て我を判き給へ。神よ、我が禱を聴き、我が口の言を聆き納れ給へ、蓋外人は起ちて我を攻め、強き者は我が靈を覓む、彼等は神を己の前に置かず。視よ、神は私の援助なり、主は我が靈を固め給ふ。彼は我が敵に其悪を報いん、爾の眞實を以て彼等を滅し給へ。主よ、我心を盡して爾に祭を獻げ、爾の名を讚め揚げん、其善なるを以てなり、蓋爾は我を諸の艱難より救ひ給へり、我が目は私の敵を見たり。

第五十四聖詠

神よ、我が禱を聆き我が願より匿るる母れ。我に耳を傾けて我に聴き給へ、我は悲の中に呻ひ、敵の聲、不虔者の責に由りて擾ふ、蓋彼等は不法を以て我を誣ひ、怒を以て我に仇す。我が心は私の衷に慄き、死の恐懼は我に及べり、驚懼

と戰栗とは我に臨み、恐惶は我を圍めり。我言えり、孰か我に鴿の翼を予ふるあらん、我飛び去りて安を獲ん、遠く離れて野に居らん、急ぎて旋風と暴風とを避けん。主よ、彼等を亂し、其の舌を分けよ、蓋我は暴虐と争競とを城邑の中に見る、彼等は晝夜其の城垣の上を繞る。其中に毒悪と患難あり、殘害は其中にあり、詭詐と誑騙とは其衢を離れず。我を誘る者は敵に非ず、敵ならば我之を忍ばん、我に高ぶる者は我が仇に非ず、仇ならば我之を避けん、乃爾嘗て我と儔しき者、我の友、我の近き者たり、我と親しき談を爲しし者、偕に神の宮に行きし者たり。願はくは死は彼等に至らん、願はくは彼等は生きながら地獄に降らん、悪事は其住所に、其間に在ればなり。惟我神に籲ばん、主乃我を救はん。晩と朝と午に我祈りて籲ばん、彼乃我の聲を聞かん、我が靈を我を攻むる者より平安に脱れしめん、彼等夥しければなり。神は聽かん、世の前より在す者は彼等を卑くせん、蓋彼等に改新なし、彼等は神を畏れず、己の手を彼等と和睦する者に伸べ、己の約に背けり、其口は膏より滑らかにして、其心に仇を懷き、其言は油より柔らかにして、是れ白刃なり。爾の重任を主に負わしめよ、彼は爾を扶けん。彼は何時も義人に撼くを容さざらん。神よ、爾は彼等を滅の阱に陥れん、血を流し、貳を行ふ者は生きて其日の半にも至るを得ず。主よ、惟我爾を頼む。

第九十聖詠

至上者の覆いの下に居る者は、全能者の蔭の下に安んず、主に謂う、爾は我の避所、  
 我の防禦、我が頼む所の我の神なりと。彼は爾を獵者の網より、滅亡の疫より  
 脱れしめん、彼は其の羽にて爾を覆わん、其の翼の下にて爾危からざるを得ん、  
 彼の眞實は楯なり、鎧なり。爾は夜の震驚と晝の流矢、闇冥に行く行疫と正午  
 に暴す瘴疫を懼れざらん。千人爾の側に、萬人爾の右に仆るとも、爾に近づ  
 かざらん、爾只目を注ぎて不虔の者の報を見ん、蓋爾謂へり、主は我の恃な  
 りと、爾至上者を選びて、爾の避所と爲せり。悪は爾に臨まず、疫癘は爾の  
 住所に近づかざらん、蓋爾の爲に其の天使に命じて、爾の凡の路に爾を護ら  
 しめん。彼等其手にて爾を抱へて、爾の足を石に蹶かざらしめん。爾蝮と毒蛇  
 とを踐み、獅と大蛇とを踏まん。彼我を愛するに因りて、我之を援けん、彼我の名  
 を識るに因りて、我之を衛らん。我を呼ばば、我彼に聽かん、憂の時我彼と偕に  
 し、彼を援け、彼を榮せん、壽考を以て彼に飽かしめ、我の救を彼に顯さん。  
 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

主憐めよ。三次

早課で「主は神なり我等を照せり」を歌う時は「光榮は」、「本日トロパリ」、「今も」「生神童貞女や我等夥しき罪」

光榮は父と子と聖神に歸す、

【本日トロパリ】

★早課で「主は神なり」の代わりに「アイルイヤ」が指定されているときは、以下のトロパリを歌う。第二調

アダムが地堂にて犯しし罪を第六日の第六時に十字架に釘つけしハリストス  
神や、我が罪の書附をも破りて我等を救ひ給へ。

第一句 神や我が禱を聆き我が願より匿るる母れ。

第二句 我神に籲ばん。主は則我を救はんとす。

光榮は父と子と聖神に歸す。今も何時も世々に。「アミン」。

今も何時も世世に、「アミン」

【生神女讃詞】

生神・童貞女よ、我等夥しき罪ありて、己に勇なきに因りて、爾より生れし者に  
祈り給へ、蓋母の禱は多く主宰の慈憐を得べし、至淨の者よ、罪人の祈を棄

つる勿れ、我等の爲に甘んじて 苦を受け給ひし者は仁慈にして人を救ふことを能  
すればなり。

主よ、願はくは爾の慈憐は速に我等を迎へん、我等甚衰へたればなり、神我等  
の救世主よ、爾の名の光榮に因りて我等を助け給へ、爾の名に因りて我等を  
救ひ、我等の罪を浄め給へ。

【聖三祝文、至聖三者、天主經】

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。 三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、  
聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。 三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天  
に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に  
債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等

を凶悪きようあくより救すくひ給たまへ。

司祭しさい 蓋國けだくにと權能けんノウと光榮こうえいは爾父なんじちちと子こと聖神せいしんに歸きす、今いまも何時いつも世世よよに。

誦經 「アミン」。

本日こんにちの聖人せいじんの【コンダク】

★齋時には左のトロパリを誦す。第二の調に依る。

ハリストス神かみよ、爾なんじは地ちの中に救すくいを施ほどこし、爾なんじが至淨しじようの手てを十字架じゆうじかに伸のべて、主しゆよ、光榮こうえいは爾なんじに歸きすと呼よぶ萬民ばんみんを集あつめ給たまへり。

光榮こうえいは父ちちと子こと聖神せいしんに歸きす、

仁慈じんじなるハリストス神かみよ、我等われら爾なんじの至淨しじようなる聖像せいざうに伏拜ふくはいして、我わが諸罪しよざいの赦ゆるしを求もとむ、蓋爾けだしなんじは其造そのつくりし者ものを敵てきの奴隸どれいより救すくはん爲ために、甘あまじて身みにて十字架じゆうじかに升のぼり給たまへり。故ゆえに我等われら感謝かんしやして爾なんじに呼よぶ、世界せかいを救すくはん爲ために來きたりし我わが救世主きゆうせいしゆよ、爾なんじは衆人しゆうじんを欣喜よろこびに満みて給たまへり。

今いまも何時いつも世世よよに、「アミン」。

☆月、火、木には

慈憐じれんの泉いずみなる生神女しやうしんじよよ、我等われらに憐あわれみを垂たれ、罪つみなる人人ひとびとを顧かえりみて、恒つねの如ごとく爾なんじの力ちからを顯あらわし給たまへ。蓋我等けだしわれらは爾なんじを恃たのみ、天軍首てんぐんしゆガウリイルガウリイルに倣ならひて爾なんじ

に呼ぶ、慶べよ。

☆水、金には

讚榮せらるる生神・童貞女よ、我等爾を歌ふ、蓋爾の子の十字架にて地獄は破られ、死は亡され、殺されし者は興きて生命を得、古に復りて地堂の福樂を受けたり。故に我等ハリストス吾が神に感謝して、其權能ありて獨仁慈なるを讚榮す。

主憐めよ。四十次

何の日何の時にも、天にも地にも叩拜讚榮せられ、寛忍、鴻慈、至善にして、義人を愛し、罪人を憐み、來世の福を約して、萬の者を救に招くハリストス神よ、爾主よ、親ら我が此の時の禱をも受け、我等の生命を爾の誠に向はしめ給へ、我等の靈を聖にし、體を潔くし、慮を直くし、思を淨くし、我等を悉くの憂と禍と疾より救ひ、爾の聖なる天使を以て我等を環り、我等が其圍に衛り導かれて、信の一なると爾の近づき難き光榮を悟るに至らせ給へ、蓋爾は世世に崇め讚めらる、「アミン」。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

ヘルワイムより尊く、セラワイムに並なく榮え、貞操を壞らずして神言を生み

し實の生神女たる爾を崇め讚む。

神父よ、主の名を以て福を降せ。

司祭 主イイススハリストス我等の神よ、吾が諸聖神父の祈祷に依りて我等を憐め

よ。

誦經 「アミン」。

☆大齋には【聖エフレムの祝文】を誦し叩拜。

【聖大ワシリイの祝文】

神、天軍の主、萬物の造作者、爾が量り難き仁愛、慈憐を以て我が族を救はん爲に、爾の獨生子吾が主イイススハリストスを遣し、其貴き十字架にて我等の罪の書券を破り、又是を以て闇冥の首領と權柄とに勝ちし至仁なる主宰よ、我等罪なる者の此の感謝と祈願との禱を納れて、諸害を爲す暗き罪、及び凡そ我等を殘はんと欲する見ゆる又見えざる諸敵より我等を救ひ給へ。我が體を爾を畏る

る畏おそれに釘くぎうち給たまへ、我が心こころを邪よこしまなる言ことば或あるは思おもに傾かたぶかしむる勿なかれ、乃すなわち爾なんじを愛あいする愛あいを以もつて我等われらの靈たましいを刺さして、我等われらに常つねに爾なんじを仰あおぎ、爾なんじよりする光ひかりに導みちびかれて、爾なんじ近づぢかき難がたき永存えいぞんの光ひかりを望のぞみ、爾なんじ無原むげんの父ちち、爾なんじの獨生どくせいの子こ、及および至聖しせい至仁しじん生いのちを施ほどこす神しんに斷たえず讚詠さんえいと感謝かんしゃとを奉たてまつらしめ給たまへ、今いまも何時いつも世世よよに、「アミン」。

早課で「主は神なり我等を照せり」を歌う時は、ここで『聖体礼儀代式(ティピカ)』を誦す。  
「アイルイヤ」を歌う時は、『聖体礼儀代式(ティピカ)』を第九時課の後に誦する。

第六時課に続いて第九時課を誦するときは、以下の順序。

聖三祝文 至聖三者 主經

主憐めよ。十二次

「光榮は」「今も」

來れ、我等の王神に叩拜せん

聖詠以下第九時課に記載したものと同様。

聖體禮儀代式（ティピカ）<sup>\*</sup>

我が靈よ、主を讃め揚げよ、主よ爾は崇讃めらる。

第百二聖詠

我が靈よ、主を讃め揚げよ、我が中心よ、其の聖なる名を讃め揚げよ。我が靈よ、主を讃め揚げよ、彼が悉の恩を忘るる母れ。彼は爾が諸の不法を赦し、爾が諸の疾を療す、爾の生命を墓より救ひ、憐と恵を爾に冠らせ、幸福を爾の望に飽かしむ、爾が若復さるること驚の如し。主は凡そ迫害せらるる者の爲に義と審判とを行ふ。彼は己の途をモイセイに示し、己の作為をイスライリの子に示せり。主は宏慈にして矜恤、寛忍にして鴻恩なり、怒りて終あり、憤を永く懷かず。我が不法に因て我等に行はず、我が罪に因て我等に報いず、蓋地のより高きが如く、斯く主を畏るる者に於ける其憐は大なり、東の西より遠きが如く、主は我が不法を我等より遠ざけり、父の其子を憐むが如く、主は彼を畏る

\* ティピカと呼ばれる課で、聖サワ修道院などで聖体礼儀が行われない日にご聖体を頂くときに読まれた。大斎中、先備聖体礼儀のときに、九時課に続けて読まれる。日本で一般に行われている「代式祈禱」とは別。

る者を憐む。蓋彼は我が何より造られしを知り、我等の塵なるを記念す。人の日は草の如く、其榮ること田の華の如し。風之を過ぐれば無に歸し、其有りし處も亦之を識らず。唯主の憐は彼を畏る者に世より世に至り、彼の義は其約を守り、其誠を懷ひて、之を行ふの子々孫々に及ばん。主は其の寶座を天に建て、其國は萬物を統治む。主の諸の天使、能力を具え、其聲に遵ひて其言を行ふ者や、主を讚め揚げよ。主の悉の軍、其旨を行ふ役者よ、主を讚め揚げよ。凡そ主の悉くの造工よ、其一切治る處に於て主を讚め揚げよ。我が靈よ、主を讚め揚げよ。

「光榮は……」 右列の詠隊朗唱。

「今も……」 左列の詠隊が朗唱する。

もう一度、右列の詠隊が下記ののように最初の句を歌う。

我が靈よ、主を讚揚げよ、我が中心よ其聖なる名を讚揚げよ。主よ爾は崇讚めらる。

光榮は父と子と聖神に歸す。

#### 第四百四十五聖詠

我が靈よ、主を讚め揚げよ。我生ける中主を讚め揚げん、我存命の中吾が神に歌

はん。牧伯を恃む母れ、救ふ能はざる人の子に恃む母れ。彼氣絶ゆれば土に歸り、凡そ彼が謀る所は即日消ゆ。イアコフの神に佑けらるる人は福なり、主神、即天地と海と凡そ其中に在る物を造り、永く眞實を守り、窘迫らるる者の爲に判をなし、餓うる者に糧を與ふる主を恃む人は福なり。主は囚人を釋き、主は瞽者の目を開き、主は屈められし者を起し、主は義人を愛し、主は羈客を護り、孤子と寡婦を佑け、惟不虔者の途を覆へす。主は永遠に王とならん、シオンや、爾の神は世々に王とならん。

今も何時も世々に。「アミン」。

神の獨生の子并に言よ、死せざる者にして我等を救はん爲めに甘んじて聖なる生神女、永貞童女マリヤより身を取り、性を易へずして人となり、十字架に釘うたれ、死を以て死を踏破りしハリストス神よ、聖三者の一として、父と聖神と共に讚榮せらるる主よ、我等を救ひ給へ。

★大齋には上記の聖詠祝文は誦さず。第九時課の「主宰イイススハリストス我等の神」の祝文の後、直に左の「主や爾の國に來らん時云々」を歌い「心の貧き者は福なり云々」以下の句に続いて附唱として「主や爾の國に……」を歌う。

【真福詞】第八調。

主よ、爾の國に於て我等を憶ひ給へ。

神の貧しき者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

(附唱)主よ、爾の國に來らん時我等を憶ひ給へ。(各句ごと繰り返す)

泣く者は福なり、彼等慰を得んとすればなり。

溫柔なる者は福なり、彼等地を嗣がんとすればなり。

義に飢え渴く者は福なり、彼等飽くを得んとすればなり。

矜恤ある者は福なり、彼等矜恤を得んとすればなり。

心の清き者は福なり、彼等神を見んとすればなり。

和平を行ふ者は福なり、彼等神の子と名づられんとすればなり。

義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

人我の爲に爾等を語り、窘逐し、爾等の事を譏りて諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり。

喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

★大齋のときには、左右の詠隊声を合わせて「主や爾の國に」「主催や」「聖なる者や」の三句をゆったり歌い、一句ごとに叩拝する。大齋以外のときは、すばやく歌う。

光榮は父と子と聖神に歸す。今も何時も世世に、「アミン」。

主よ、爾の國に於て我等を憶ひ給へ。叩拜一次

主宰よ、爾の國に來らん時我等を憶ひ給へ。叩拜一次

聖なる者よ、爾の國に來らん時我等を憶ひ給へ。

天軍爾を歌ひて曰ふ、聖、聖、聖なる哉主サワオフ、爾の光榮は天地に徧し。

(句) 目を舉げて彼を仰ぐ者は照されたり、彼等の面は愧を受けざらん。

天軍爾を歌ひて曰ふ、聖、聖、聖なる哉主サワオフ、爾の光榮は天地に徧し。

光榮は父と子と聖神に歸す。

聖天使及び天使首の群は衆天軍と共に爾を歌ひて曰ふ、聖、聖、聖なる哉主サワ

オフ、爾の光榮は天地に徧し。

今も何時も世世に、「アミン」。

【信經】

我信ず、一の神、父、全能者、天と地、見ゆると見えざる萬物を造りし主を。又信ず一の主イエス・ハリストス、神の獨生の子、萬世の前に父より生れ、光よりの光、眞

の神よりの眞の神、生れし者にて、造られしに非ず、父と一體にして、萬物彼に造られ、我等人人の爲、又我等の救の爲に天より降り、聖神及び童貞女マリヤより身を取り、人となり、我等の爲にポンティイ・ピラトの十字架に釘うたれ、苦を受け、葬られ、第三日に聖書に應ひて復活し、天に升起、父の右に座し、光榮を顯して生ける者と死せし者とを審判する爲に還來り、其國終なからんを。又信ず、聖神、主、生を施す者、父より出で、父及び子と共に拜まれ、讚められ、預言者を以て嘗て言ひしを。又信ず一の聖なる公なる使徒の教會を。我認む一の洗禮、以て罪の赦を得るを。我望む死者の復活、並に來世の生命を、「アミン」。

神よ、我が自由と自由ならざると、言と行と、知ると知らざると、晝に夜に、思と心にて犯しし諸の罪を宥め、之を釋き、之を赦せ、仁慈にして人を愛する主よ、皆我等に赦し給へ。

【天主經】

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救ひ給へ。

司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

【コンダク】主宰の祭日の場合は、ここで祭日のコンダクを誦する。聖人の祭日の場合は、まず聖人のコンダクを誦し、後「光榮は」、「今も」に続いて主のコンダクを誦す。

「アイルイヤ」を歌うように指定されている日、または主宰の祭日も聖人の祭日でもない時は、まず【主の顯榮のコンダク】を誦し、それから本日及び本聖堂のコンダクを誦する。ただし主の祭日に献ぜられた聖堂の場合には、最初に聖堂のコンダクを誦し、それからその曜日、当日の聖人のコンダクを誦する。

光榮は父と子と聖神に歸す。

ハリストスよ、爾が僕婢の靈を諸聖人と偕に疾も悲も歎もなく、惟終なき生命のある處に安んぜしめ給へ。または生神女に献ぜられた聖堂の場合は聖堂のコンダクを誦する。今も何時も世世に、「アミン」。

【主の顯榮のコンダク】

ハリストス神や、爾が山に於いて変容せし時、爾の門徒は容るるに稱ひて爾の光榮を觀たり。此れ後に爾が十字架に釘うたるるを觀て、苦の自由なるを悟り、爾が實に父の光なるを世界に傳へんが爲なり。

月曜日には天使のコンダク。第二調

聖なる天軍首、神の光榮の役者、諸神使の幸、及び人々の教導者や、我等の為に益あることと大なる憐れを求め給へ、爾等は無形の軍の首長なればなり。

火曜日には前驅のコンダク

神の預言者恩寵の前驅や、我等爾の首を聖せられし花の如く、地より獲て恒に愈るを得、蓋爾は今も古の如く世に悔改を傳ふればなり。

水金曜日には十字架のコンダク 第四の調

甘んじて十字架に擧げられしハリストス神よ、爾が同名の新なる住所に爾の慈憐を賜へ。爾の力を以て、我が国を司る者を楽しませしめて、彼に諸敵に勝たしめ給へ。彼は爾の援助として平安の武器、勝たれぬ旗を有てばなり。

木曜日には聖使徒のコンダク 第二の調

主よ、爾は堅固にして神妙なる傳道師、爾が門徒の首たる者を爾の福の樂みと安息とに納れ給へり。獨心中をる者や、爾彼等の勞と死を凡の果実の獻物より勝りて受けたればなり。

同日には聖ニコライのコンダク 第三の調

聖なる者や、爾はミル城に顯れて聖なる務を行へり。克肖者よ、爾はハリストスの福音に遵ひて爾の生命を爾の人々の爲に捐て、罪なき者を死より救ひ給へり。故に聖せられて神の恩寵の大なる秘密者となれり。

「スボタ」には

光榮は父と子と聖神に歸す。

ハリストスよ、爾が僕婢の靈を諸聖人と偕に疾も悲も歎もなく、惟終なき生命のある處に安んぜしめ給へ。今も何時も世々に、「アミン」。

致命者のコンダク 第八の調

主や、全世界は捧神なる致命者を、萬物の初實として爾萬物を植附けし者に奉る。大仁慈なる者や、彼等と生神女の祈祷に依て爾の住所なる爾の教會を深き平安に守り給へ。

以下のコンダクは「スボタ」以外は毎日誦する。

「ハリスティアニン」等の辱を得ざる轉達、造物主の前に變らざる中保よ、罪なる者の禱の聲を斥くる勿れ、仁慈なるに依りて速に我等を助け給へ、蓋我等切に爾に呼ぶ、生神女よ、爾を尊む者に常に代りて、急ぎて禱り、切に求め給へ。

大四旬齋には以下の通り。

主憐めよ。四十次

光榮云々 今も云々

ヘルウィムより尊く云々

神父や主の名を以て福を降せ。

司祭 神や、我等に恩を被らし云々。

聖エフレムの祝文及び規定の叩拜。

畢て後、司祭晩課を始む。

誦經 來れ我等の王神に叩拜せん云々。

### 第三百三聖詠

我が靈や主を讃揚げよ云々。

大四旬齋に以外はコンダクの後、下記の通り。

主憐めよ。十二次

### 祝文

至聖なる三者、一性の權柄、分れざる國、萬善の源よ、我罪人の爲にも慮り給へ。我が心を固め、之を悟らせ、我が諸の汚を除き給へ。我が智識を照し、我に常に讚榮讚頌叩拜して誦へさせ給へ。聖なるは一、主なるは一、神父の光榮を顕す

イイススハリストスなり、「アミン」。

願は主の名は崇讃められ、今より世々に至らん。三次  
光榮は父と子と聖神に歸す。今も何時も世々に、「アミン」。

### 第三十三聖詠

我何の時に主を讃揚げん、彼を讃むるは恒に我が口に在り。我が靈は主を以て誇らん、溫柔なる者は聞て樂まん。我と偕に主を尊め、偕に彼の名を崇め讃めん。我嘗て主を

尋ねしに、彼は我に聆納れて、我が都ての危きより我を免れしめ給へり。目を擧げて彼を仰ぐ者は照されたり、彼等の面は愧を受けざらん。此の貧しき者呼びしに、主は聆き納れて、之を其の悉の艱難より救へり。主の使は主を畏るる者を環り衛りて、彼等を援く。味へよ、主の如何に仁慈なるを見ん、彼を恃む人は福なり。凡そ主の聖人や、主を畏れよ、蓋彼を畏るる者は乏きことなし。少き獅は乏くして餓え、唯主を尋る者は何の幸福にも缺るなし。小子や、來て我に聽けよ、主を畏るるの畏れを爾等に訓えん。人、生くるを望み、又長命へて幸福を見んことを欲するか、爾の舌を悪より、爾の口を譎の言より止めよ。悪を避けて善を行ひ、和平を尋て之に従へ。主の目は義人を顧み、其耳は彼等の呼ぶを聆く。唯主

の面は悪を爲す者に對ふ、其名を地より亡ぼさん為なり。義人は呼ぶに、主は之を聴き、彼等を悉の憂より免かれしむ。主は心の傷める者に近し、靈の謙だる者を救はん。義人には憂多し、然れども主は之を悉く免しめん。主は彼が悉の骨を護り、其一も折れざらん。悪は罪人を殺し、義人を憎む者は亡びん。主は其の諸僕の靈を救ひ、彼を頼む者は一人も亡びざらん。

常に福にして全く玷なき生神女、吾が神の母なる爾を福なりと稱ふるは眞に當れり、ヘル

ワイムより尊くセラフイムに並びなく榮え、貞操を壞らずして神言を生みし實の生神女たる爾を崇讃む。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、「アミン」。

主憐めよ。 三次

福を降せ。

司祭發放詞を誦す。

## 第九時課

司祭 我等の神は崇め讃めらる、今も何時も世々に、

誦經 「アミン」

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

天の王、慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、満たざる所なき者よ、萬善の寶藏なる者、生命を賜ふ主よ、來りて我等の中に居り、我等を諸の穢より潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救ひ給へ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に

債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦經 「アミン」。

主憐めよ。十二次

「光榮は「今も」

來れ、我等の王・神に叩拜せん。

來れ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。

來れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

### 第八十三聖詠

萬軍の主よ、爾の住所は何ぞ愛すべき。我が靈は厚く慕ひて主の庭を望み、我が心我が身は生活の神に馳す。萬軍の主、我が王、我が神よ、雀も己の宿を獲、燕も己の巢を獲て、雛を爾が祭壇の傍に置く。爾の家に住む者は福なり、彼等は常に爾を讚め揚げん。力を爾に恃み、心の路を爾に向くる人は福なり。彼等は涙の谷を過りて、其中に泉を得、雨は降福にて之を覆う、彼等は力

より力に進み、シオンに於て神の前に顯る。主萬軍の神よ、我が禱を聽け、イアコフの神よ、聽き納れ給え。神、我等を衛る主よ、俯して爾が膏つけられし者の面を視よ。蓋一日爾の庭に在るは千日に勝る、我悪者の幕に住まんよりは、寧神の家の闕の側に居らん。蓋主神は日なり、盾なり、主は恩寵と光榮とを賜ふ、行の玷なき者より幸福を奪はず。萬軍の主よ、爾を恃む人は福なり。

#### 第八十四聖詠

主よ、爾は已に憐を爾の地に施し、イアコフの俘を歸せり、爾の民の不法を赦し、其凡ての罪を掩い、爾が悉くの忿を罷め、爾が怒の烈しきを除き給へり。我が救の神よ、我等を起し、爾が我等に於ける憤を釋き給へ。豈永く我等を忿り、爾の怒を世世に伸べんとするか、豈新に我等を活かして、爾の民に爾の事を悦ばしめざらんとするか。主よ、爾の憐を我等に顯し、爾の救を我等に施し給へ。我は主神の言はんとする所を聽かん、彼は平安を其民と其選びし者に謂はん、唯願はくは彼等は再無智に陥らざらん。此くの如く彼の救は彼を畏るる者に邇し、光榮の我が地に居らん爲なり。慈憐と眞實と相交り、義と和平と相接吻せん、眞實は地より出で、義は天より臨まん、主は、幸福を與へ、我が地は其果を與へん、義は彼の前に行き、其足を路に立てん。

第八十五聖詠

主よ、爾の耳を傾けて我に聴き給へ、我乏しくして貧しければなり。我が靈を護  
 れ、我爾の前に慎しめばなり、我が神よ、爾を待める爾の僕を救ひ給へ。主よ、我  
 を憐め、我日に爾に呼べばなり。爾の僕の靈を樂しましめ給へ、主よ、  
 我が靈を爾に擧ぐればなり、蓋主よ、爾は仁慈慈憐にして、凡そ爾を呼ぶ者  
 に洪恩なり。主よ、我が禱を聴き、我が願の聲を聆き納れ給へ。我が憂の日に爾  
 に呼ぶ、爾我に聽かんとすればなり。主よ、諸神の中爾に如く者なく、爾の作爲  
 に如くはなし。主よ、爾に造られし萬民は來りて爾の前に伏拜し、爾の名を讚榮  
 せん、蓋爾は大にして、奇蹟を行ふ、爾神よ、獨爾なり。主よ、我を爾の路  
 に導き給へ、然せば我爾の眞理に行かん、我が心を爾の名を畏るる畏に固め給  
 へ。主我が神よ、我心を盡して爾を讚美し、永く爾の名を讚榮せん、蓋我に於け  
 る爾の憐は大なり、爾は我が靈を甚と深き地獄より援け給へり。神よ、驕  
 る者は起ちて我を攻め、暴虐者の黨は我が靈を尋ぬ、彼等は爾を己の前に置  
 かず。然れども爾主、宏慈にして矜恤、寛忍にして洪恩、眞實なる神よ、我を顧  
 み、我を憐み、爾の力を爾の僕に賜ひ、爾の婢の子を救ひ給へ。恩の徴を我  
 に顯し給へ、我を疾む者は之を見て爲に愧を得ん、爾主よ、我を助け、我を慰

め給ひしに因る。

恩の徴を我に顯し給へ、我を疾む者は、之を見て爲に愧を得ん、爾主よ、我を助け、我を慰め給ひしに因る。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「ア ril l i y a」「ア ril l i y a」「ア ril l i y a」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

主憐めよ。三次

早課で「主は神なり我等を照せり」を歌う時は以下のように行う。

「光榮は」に続いて、「本日トロパリ」

「今も」に続いて、※「我等の為に童貞女より生れ」

「ア ril l i y a」を歌う指定の日には、下記のトロパリを歌う。第八調

第九時に我等の爲に身にて死を嘗めしハリストス神よ、我が肉體の念を殺して、我等を救ひ給へ。

第一句、主よ、願はくは我が籲聲は爾が顔の前に遡づかん、爾の言に循ひて我を悟せら給へ。

第二句、願はくは我が禱は爾が顔の前に至らん、爾の言に循ひて我を救ひ給へ。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、「アミン」。

※生神女讃詞

我等の爲に童貞女より生れ、十字架に釘うたるるを忍び、神なるに依りて死にて死を滅し、復活を顯しし仁慈なる主よ、爾の手にて造りし者を棄つる勿れ、慈憐の主よ、爾が人を愛する愛を顯して、我等の爲に祈祷する所の爾を生みし生神女を受け給へ、我が救主よ、望を失へる人人を救ひ給へ。  
爾の名に因りて我等を終まで棄つる勿れ、爾の盟約を破る勿れ、爾の憐を我等より除く勿れ、爾が愛する所のアウラムと、爾の僕イサクと、爾の聖なるイズライリとに因りてなり。

【聖三祝文、至聖三者、天主經】

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。 三次  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。  
至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。  
主憐めよ。 三次  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天てんに在います我等われらの父ちちよ、願ねがはくは爾なんじの名なは聖せいとせられ、爾なんじの國くには來きたり、爾なんじの旨むねは天てんに行いはるるが如ごとく地ちにも行いはれん、我わが日用にちようの糧かてを今日こんにち我等われらに與あたへ給たまへ、我等われらに債おいめある者ものを我等われら免ゆるすが如ごとく、我われら等の債おいめを免ゆるし給たまへ、我等われらを誘いざないに導みちびかず、猶なお我等われらを凶きようあく悪すくより救すくひ給たまへ。

司祭けだしくに 蓋けんのう國こうえいと權能なんじちちと光榮こは爾父せいしんと子きと聖神いまに歸いつす、今よも何時よも世世よに。

誦經 「アミン」。

祭日には【祭日のコンダク】を誦す。

祭日でない場合は以下のコンダクを誦す。第八調。

盜賊とうぞくは生命いのちの首かしらが十字架じゅうじかに懸かかれるを見て曰いへり、我等われらと共に釘くぎうたれし者ものは、若もし身みを取りし神かみに非あらずば、日ひは其光線そのこうせんを隠かくさず、地ちも戰ふるひ慄おのかざらん、萬よろずの事ことを忍しのぶ主しゆよ、爾なんじの國くにに於おいて我われを憶おもひ給たまへ。

光榮こうえいは父ちちと子こと聖神せいしんに歸きす、

爾なんじの十字架じゅうじかは二人ふたりの盜賊とうぞくの間あいだに在ありて義ぎの權衡はかりと爲なれり、一人ひとりは謗そしりの重おもきを以もつて地獄じごくに降くだされ、一人ひとりは罪つみを釋とかれ輕かるくせられて、神學しんがくの智識ちしきに昇のぼせられて、ハリストス神かみよ、光榮こうえいは爾なんじに歸きすと讚揚さんようするを悟さとれり。

今も何時も世世に、「アミン」。

爾を生みし者は爾 羔にして牧者たる世界の救主が十字架に在るを見て、泣きて曰へり、吾が子吾が神よ、世界は救を獲て喜び、我は爾が衆人の爲に忍びて釘うたるるを見て心を灼けり。

主憐めよ。 四〇次

何の日何の時に、天にも地にも叩拜讚榮せられ、寛忍、鴻慈、至善にして、義人を愛し、罪人を憐み、來世の福を約して、萬の者を救に招くハリストス神よ、爾主よ、親ら我が此の時の禱をも受け、我等の生命を爾の誠に向はしめ給へ、我等の靈を聖にし、體を潔くし、慮を直くし、思を淨くし、我等を悉くの憂と禍と疾より救ひ、爾の聖なる天使を以て我等を環り、我等が其圍に衛り導かれて、信の一なると爾の近づき難き光榮を悟るに至らせ給へ、蓋爾は世世に崇め讚めらる、「アミン」。

主憐めよ。 三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。  
ヘルワイムより尊く、セラフイムに並なく榮え、貞操を壞らずして神言を生み

し實じつの生神女しょうしんじよたる爾なんじを崇め讚ほむ。

神父しんがよ、主しゆの名なを以て福ふくを降くだせ。

司祭かみ 神われらよ、我等おんに恩こうむを被われららせ、我等われらに福ふくを降くだし、爾なんじの顔かんばせを以て我等われらを照てらし、並ならびに我等われらを憐あわれみ給たまへ。

誦經 「アミン」。

★大齋には聖エフレムの祝文を誦し、三次叩拜。

続いて、以下の「主宰イイススハリストス吾が神や云々」の祝文を誦し、「主や爾の國に來らん時云々」を歌う。以下「聖體禮儀代式」に記す。

齋時以外の時は、司祭高聲の後以下の祝文を誦す。

【聖大ワシリイの祝文】

誦經 主宰しゆさいイイススハリストス吾わが神かみよ、我等われらの罪つみを寛忍かんにんして、我等われらを今いまの時に至いたらしめ給たまひし主しゆよ、昔むかしこ此ときの時に生命いのちを施ほどこす木きに懸かかりて、善智ぜんちなる盜賊とうぞくの爲ために天堂てんどうの道みちを啓ひらき、死しを以て死しを滅ほろぼし給たまひし主しゆよ、我等われら罪つみなる爾なんじの當あたらざる僕ぼくを淨きよめ給たまへ、我等われら罪つみを犯おかし、不法ふほうを行おこなひ、目を舉あげて天てんの高たかきを見るみるに堪たへざればなり、蓋けだしなんじ爾なんじの義ぎの道みちを離はなれ、私慾しよくを恣ほしいのままにして日ひを送おくれり。主しゆよ、爾なんじの量はかり難がたき仁慈じんじに祈いのる、爾なんじが多おほくの憐あわれみに因よりて我等われらを宥なだめ、爾なんじの聖せいなる名なに因よりて我等われらを救すくひ

給へ、我が日空しく消ゆればなり。我等を敵の手より援け給へ、我等が諸の罪を赦し給へ、我等が肉體の念を殺し給へ、我等舊き人を脱ぎ、新しき人を衣、爾我等の主宰及び恩者の爲に生き、此くの如く爾の誠に遵ひて、悉くの樂しむ者の住所なる永遠の安息に至らん爲なり。蓋ハリストス吾が神よ、爾は實に爾を愛する者の眞の樂と喜なり、我等爾と、爾の無原の父と、至聖至仁生命を施す爾の神とに光榮を歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に「アミン」。

主 憐 め よ。 三 次

福を降せ。

司祭發放詞を誦す。

晩 課

司祭、我等の神は崇讚らる、今も何時も世々に

誦經、「アミン」

來れ、我等の王・神に叩拜せん。

來れ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。

來れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

第三百三聖詠

我が靈よ、主を讚め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり、爾は光榮と威嚴  
とを被れり。爾は光を袍の如くに衣、天を幔の如くに張る、水の上に爾の宮  
を建て、雲を爾の車と爲し、風の翼にて行く。爾は風を以て爾の使者と爲し、  
焰を以て爾の役者と爲す。爾は地を固き基に建てたり、此れ世世に動かざらん。  
爾は淵を以て衣服の如くに之を覆へり、山の巔に水立つ。爾の恐嚇に依りて此  
れは奔り、爾の雷の聲に由りて速に去る。山に升り、澗に降り、爾の此れが爲  
に定めし處に至る。爾界を立てて之を躐えざらしむ、反りて地を覆わざらん。爾  
は泉を澗に遣せり、山の間に水は流れ、野の諸の獸に飲ましむ、野の驢

は其渴を止む。空の鳥は其の傍に棲み、枝の間より聲を出す。爾は上なる宮より山を潤し、地は爾の造工の果にて鑿き足れり。爾は草を獸の爲に生ぜしめ、野菜を人の需の爲に生ぜしめて、地より食物を出さしむ。酒は人の心を樂しませ、膏は其の面を澤し、餅は人の心を養ふ。主の樹、其植えたるリワンの柏香木は鑿き足れり、鳥は其上に巢を造る、松は鶴の棲處たり、高き山は鹿の爲、磐石は兎の爲に避所たり。主は月を造りて時を定め、日は其入る處を知る。爾暗を布けば、則夜あり、其時林の獸皆出で廻る、獅は獲物の爲に吼えて、其食を神に乞ふ。日出づれば、彼等集りて己の穴に伏す。人は其工作の爲に出で、勞きて暮に至る。主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作れり、地は爾の造物にて満ちたり。夫の大にして廣き海、彼處には無數の動物、大小の生物あり、彼處には舟通ひ、彼處には彼の大魚あり、爾造りて其中に遊ばしむ。彼等は皆爾が時に随ひて食を予ふるを待つ。之に予ふれば受け、爾の手を開けば、賜に鑿かせらる、爾の顔を隱せば惶れ惑ひ、其の氣を取り上ぐれば死して塵に歸る。爾の氣を施せば造られ、爾は又地の面を新にす。願はくは光榮は世世に主に在らん、願はくは主は己の造工の爲に樂まん。彼地を觀れば、地震い、山に觸るれば、煙起つ。我生ける中主にひ、世を終ふるまで我が神に歌わん。願はくは我が歌は彼に悦

ばれん、我主の爲に樂まん。願はくは罪人等は地より消え、不法の者は存するなけん。我が靈よ、主を讚め揚げよ。

日は其入る處を知る、爾暗を布けば、則夜あり。

主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作れり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

【大連禱】 【聖詠經】(カフィズマ) 【小連禱】

続いて指定された調で「主や爾に呼ぶ云々」を歌う。一四〇、一四一、一二九、一一六聖詠の最後にステイヒラを挿入する。

### 第四百十聖詠

主よ、爾に籲ぶ、速に我に格り給へ。主よ、我に聽き給へ。主よ、爾に籲ぶ、速に我に格り給へ。爾に籲ぶ時我が禱の聲を納れ給へ。主よ、我に聽き給へ。

願はくは我が禱は香爐の香の如く爾が顔の前に登り、我が手を擧ぐるは暮の祭の如く納れられん。主よ、我に聽き給へ。

嗣ぎて以下の句を誦す、

主よ、我が口に衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給へ、我が心に邪なる言に傾

きて、不法を行ふ人と共に罪の推誘せしむる母れ、願は我は彼らの甘を嘗めざらん。義人は我を罰すべし、是れ矜恤なり、我を譴むべし、是れ極と美き膏我が首を悩ます能はざる者なり、唯我が禱は彼等の悪事に敵す。彼等の首長は巖石の間に散じ、我が言の柔和なるを聴く。我等を土の如く斫り碎き、我が骨は地獄の口に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は爾を仰ぎ、我爾を恃む、我が靈を退くる勿れ。我が爲に設けし罌、不法者の羅より我を護り給へ。不虔者は己の網に羅り、唯我は過ぐるを得ん。

第四百十一聖詠

我が聲を以て主に籲び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂を其前に顯はせり。我が靈我の衷に弱りし時、爾は我の途を知れり、我が行く路に於て彼らは竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我に遁るる所なく、人の我が靈を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて云へり、爾は我の避所なり、生ける者の地に於て我の分なり。我が籲を聴き給へ。我甚だ弱りたればなり、我を迫害する者より救ひ給へ、彼等は我より強ければなり。

我が靈を獄より曳出して、我に爾の名を讃揚せしめ給へ、

「ステイヒラ十句立てて」と指定があるときはここから順に挿入していく。㊦①  
爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。

ステイヒラ㊦②

第二百二十九聖詠

主や、我深き處より爾に籲ぶ。主や、我が聲を聴き給へ。

ステイヒラ㊦③ ステイヒラ8句立ててと指定がある場合はここから。㊦①

願は爾の耳は我が禱の聲を聴納れん。

ステイヒラ㊦④ ㊦②

主や爾若し不法を糾さば、主よ孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人に爾の前に敬まん為なり。

ステイヒラ㊦⑤ ㊦③ 「ステイヒラ6句たてて」と指定がある場合はここから。㊦①

我主を望み、我が靈は主を望み、我彼の言を待む。

ステイヒラ㊦⑥ ㊦④ ㊦②

我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

ステイヒラ㊦⑦ ㊦⑤ ㊦③ 「ステイヒラ4句立てて」と指定がある場合はここから。㊦①

願はイズライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉の不法より贖はん。

ステイヒラニ⑧ ⑧-⑥ ⑧-④ ④-②

第一百十六聖詠

萬民ばんみんや、主しゅを讚揚ほめあげよ、萬族ばんぞくや、彼かれを崇讚あがめほめよ。

ステイヒラニ⑨ ⑧-⑦ ⑧-⑤ ④-③-①

蓋けだし彼かれが我等われらに施ほどこす憐あわれみは大おおいなり、主しゅの眞實しんじつは永ながく存そんす。

ステイヒラニ⑩ ⑧-⑧ ⑧-⑥ ④-④

光榮こうえいは、今いまも

その日の【生神女讚詞】(生神女ドグマティカ、八調経、祭日経など参照)

イエルサリムの總主教聖ソフロニイの祝文

聖せいにして福ふくたる常生じょうせいなる、天てんの父ちちの聖せいなる光榮こうえいの穩おだやかなる光ひかりイイスス・ハリス  
トスや、我等われら日の入いりに至いたり、晚くれの光ひかりを見て、神父かみちちと子こと聖神せいしんを歌うたふ。生命いのちを賜たまふ神かみ  
の子こや、爾なんじは何時いつも敬虔けいけんの聲こえにて歌うたはるべし、故ゆえに世界せかいは爾なんじを崇讚あがめほむ。

大齋または「ア rilルイヤ」を歌う指定があるときは各曜日まいにちのポロキメンの代りに下記のように歌う。

月曜日げつようびの晩

「ア rilルイヤ」三次。第六の調に依る。

句く、主しゅや、爾なんじの憤いきどおりを以もつて我われを責せむる勿なかれ、爾なんじの怒いかりを以もつて我われを罰ばつする勿なかれ。

「ア rilルイヤ」

句く、世々よよに

朗聲、「アリルイヤ」

火、木両曜日の晩

「アリルイヤ」

句、主吾が神を尊崇めよ、其の足凳に俯拜めよ。是聖なればなり。  
句、世々に

水曜日の晩

「アリルイヤ」

句、其聲は全地に傳はり、其言は地の極に至れり。  
句、世々に

主日と金曜日の晩には「アリルイヤ」を歌わない。

「主は神なり我等を照せり」のある時には【ポロキメン】を以下のように歌う。

主日の晩 第八調

主の諸僕、夜中主の堂に立つ者や、今主を崇讚めよ。  
句、爾の手を揚げ、聖所に向ふて主を崇讚めよ。

月曜日の晩 第四調

我籲べば、主は之を聴く。

句、吾が義の神や、我が籲ぶ時我に聴き給へ。

火曜日の晩 第一調

主しゅや願ねがは爾なんじの仁慈いつくしみと慈憐あわれみは我われが生命いのちあるの日ひ我われに伴ともなはん。  
句、主しゅは我われの牧者ぼくしやなり、我われ萬事ばんじに乏とほしからざらん、彼かれは我われを茂しげき草場くさばに休いこはす。

水曜日の晩 第五調

神かみや、爾なんじの名なを以もつて我われを救すくひ、爾なんじの力ちからを以もつて我われを判さばき給たまへ。  
句、神かみや、我われが禱いのりを聽きき我われが口くちの言ことばを聆納ききいれ給たまへ。

木曜日の晩 第六調

我われが助たすけは天地てんちを造つくりし主しゅより來きたる。  
句、我われ目を舉あげて山やまを望のぞむ、我われが助たすけは彼處かしこより來きたる。

金曜日の晩 第七調

吾われが神かみ、我われを憐あわれむ者は我われに先さきだたん。  
句、吾われが神かみや、我われを諸敵しよてきより援たすけ、我われを攻せむる者ものより衛まもり給たまへ。

「スボタ」の晩 第六調

主しゅは王おうたり、彼かれは威嚴いげんを衣きたり。  
句、主しゅは能力のうりよくを衣き、又また之これを帯おびにせり。

句、故に世界は堅固にして動かざらん。  
句、主や、聖徳は爾の家に属して永遠に至らん。

★土曜日、祭日の前晩には【重連禱】。平日はポロキメンに続いて「主よ、我等を守り」。

主よ、我等を守り、罪なくして此の晩を渡らせ給へ。主吾が先祖の神よ、爾は崇め讃められ、爾の名は世世に尊み歌はる、「アミン」  
主よ、爾を恃むに因りて、爾の憐を我等に垂れ給へ。主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に訓へ給へ。主宰よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に悟らせ給へ。聖なる者よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠にて我を照し給へ。  
主よ、爾の憐は世世に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿れ。讃は爾に歸し、歌は爾に歸し、光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」

【増連禱】我等の晩の禱を増して主に献らん云々

【挿句讃頌】。主宰の祭日以外の場合はステイヒラのと★以下の句を挿入する。主日祭日の場合は、八調経、祭日経などに句が記載される。★普通ステイヒラでは句が先行するが、ステイヒラのとに句がつくので「挿句」「アポ・ステイカ(後に句)」という。

ステイヒラ①

第一句、天てんに居おる者ものよ、我われ目を舉あげて爾なんじを望のぞむ。視みよ、僕ぼくの目主人めしゅじんの手てを望のぞみ、婢ひの目主婦めしゅふの手てを望のぞむが如ごとく、我われ等の目めは主我しゅわが神かみを望のぞみて、其我そのわれ等を憐あわれむを俟まつ。

ステイヒラ②

第二句、主われよ、我われ等を憐あわれみ、我われ等を憐あわれみ給たまへ、蓋けだし我われ等は侮あなぢりに贖あき足たれり、我われ等の靈たましいは驕おごる者ものの辱はずかしめと誇ほこる者ものの侮あなぢりとに贖あき足たれり。

「光榮は」「今も」

【生神女讃詞】

【聖抱神者シメオンの祝文】

主宰しゅさいよ、今いま爾なんじの言ことばに循したがひて、爾なんじの僕ぼくを釋ゆるし、安あん然ぜんとして逝ゆかしむ。蓋けだし我われが目めは爾なんじの救すくいを見みたり、爾なんじが萬民ばんみんの前まえに備そなへし者ものなり、是これ異邦人いほうじんを照てらす、光ひかり及び爾なんじの民たみイズライリの榮さかえなり。

【聖三祝文、至聖三者、天主經】

聖せいなる神かみ、聖せいなる勇毅ゆうぎ、聖せいなる常生じょうせいの者ものよ、我われ等を憐あわれめよ。三次

光榮こうえいは父ちちと子こと聖神せいしんに歸きす、今いまも何時いつも世世よよに、「アミン」。

至聖しせい三者さんしやよ、我われ等を憐あわれめ、主しゅよ、我われ等の罪つみを潔いさぎよくせよ、主宰しゅさいよ、我われ等の愆あやまちを赦ゆるせ、

聖せいなる者ものよ、臨のぞみて我われ等の病やまいを癒いやし給たまへ、悉ことごとく爾なんじの名なに因よる。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

「アミン」。

※1. 『徹夜禱』を行わない場合は、【祭日のトロパリ】または本日記憶される【聖人のトロパリ】（発放トロパリ、アポリティキオン）「光榮は「今も」【生神女讚詞】、【重連禱】。終わりのやりとり

※2. 十二大祭で【五餅の祝福】がある場合は【祭日のトロパリ三回】、他の場合は【祭日あるいは聖人のトロパリ】を二回と「生神童貞女や慶べよ」、【五餅の祝福】、第33聖詠10句まで、司祭「願わくは主の降福は其の恩寵と仁愛と・・・」アミン

※3. 『徹夜禱』を行う場合は、【天主經】のあと、【発放トロパリ】、「願わくは主の名は」「願わくは主の降福は」「アミン」のあと、早課の【六段の聖詠】へ。主日に【五餅の祝福】がなくて、「徹夜禱」を行う場合は「生神童貞女や慶べよ」三回を歌う。

大齋または他の齋期、早課で「主は神なり」の代わりに「アイルイヤ」を歌うときは以下のトロパリを歌う。第四調。

生神童貞女や、慶べよ、恩寵に満たさるるマリヤや、主は爾と偕にす、爾

は女おんなの中うちにて讚美さんびたり、爾なんじの胎はらの果みも讚美さんびたり、爾なんじは我等われらの靈たましいを救すくふの  
主しゅを生うめばなり。叩拜くわいはい一次

光榮こうえいは父ちちと子こと聖神せいしんに歸きす。  
ハリストスの授洗じゅせん者しやや、我等われら衆人しゅうじんを記憶きおくして、我わが不法ふぼうより救すくはるるを得えせ  
しめ給たまへ、我等われらの爲ために祈きとつするの恩寵おんちゆうは爾なんじに賜たまはりたればなり。叩拜くわいはい一次  
今いまも何時いつも世世よよに「アミン」。

聖使徒せいしとと諸聖人しよせいじんや、我等われらの爲ために祈いのりて、我等われらに禍わざわいと憂うれいより救すくはるるを得えせ  
しめ給たまへ、爾等なんじらは救世主きゆうせいしゅの前に吾わが熱心ねっしんの中保者ちゆうほしやなればなり。叩拜くわいはい一次  
生神女しょうしんじよや、我等われら爾なんじが慈憐じれんの下もとに趨はしりつ附つく、危あやうき時ときに於おいて我等われらの祈きとつを輕かろんず  
る勿なかれ、獨ひとり淨きよく、獨ひとり崇讚あがめほめらるる者ものや、我等われらを諸もろもろの禍わざわいより救すくひ給たまへ。

主憐しゅあわれめよ。四十次

光榮こうえいは父ちちと子こと聖神せいしんに歸きす、今いまも何時いつも世世よよに、「アミン」

ヘルワイムより尊とく、セラフイムに並ならびなく榮さかえ、貞操みさおを壞やぶらずして神言かみことば  
を生うみし實じつの生神女しょうしんじよたる爾なんじを崇讚あがめほむ。

神父しんぶや主しゅの名なを以もつて福ふくを降くだせ。

司祭しさい、ハリストス我等われらの神かみは崇讚あがめほめらる、今いまも何時いつも世世よよに、

誦經、「アミン」

天の王や、我等の皇帝を佑け、正教を固め、異教を循はせ、世界を穩にし、克く此の聖堂を護り、已に過ぎ去りし我等の諸父兄弟を義人の住居に置き、並に我等の痛悔と承認を納れ給へ、爾は仁慈にして人を愛するの主なればなり。

【聖エフレムの祝文】

大斎の場合の式順は、

【聖三祝文、至聖三者、天主經】

主憐めよ。十二次

祝文

至聖なる三者、一性の權柄、分れざる國、萬善の源よ、我罪人の爲にも慮り給へ。我が心を固め、之を悟らせ、我が諸の汚を除き給へ。我が智識を照し、我に常に讚榮讚頌叩拜して誦へさせ給へ。聖なるは一、主なるは一、神父の光榮を顯すイエススハリストスなり、「アミン」。

願くは主の名は崇讚められ今より世世に至らん。三次、

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」

願はくは主の名は崇讚められ今より世々に至らん。三次、躬拜三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、「アミン」。

第三十三聖詠

我何の時に主を讃め揚げん、彼を讃むるは恒に我が口に在り、我が靈は主を以て誇らん、溫柔なる者は聞きて樂まん。我と偕に主を尊め、偕に彼の名を崇め讃めん。我嘗て主を尋ねしに、彼は我に聆き納れて、我が都ての危きより我を免れしめ給へり。目を擧げて彼を仰ぐ者は照されたり、彼等の面は愧を受けざらん。此の貧しき者籲びしに、主は聆き納れて、之を其の悉くの艱難より救へり。主の使は主を畏るる者を環り衛りて、彼等を援く。味へよ、主の如何に仁慈なるを見ん、彼を恃む人は福なり。凡そ主の聖人よ、主を畏れよ、蓋彼を畏るる者は乏しきことなし。少き獅は乏しくして餓え、唯主を尋ぬる者は何の幸福にも缺くるなし。小子よ、來りて我に聽け、主を畏るるの畏を爾等に訓へん。人生くるを望み、又壽へて幸福を見んことを欲するか、爾の舌を悪より、爾の口を譎の言より止めよ。悪を避けて善を行ひ、和平を尋ねて之に従へよ。主の目は義人を顧み、其耳は彼等の呼ぶを聆く。唯主の面は悪を爲す者に對ふ、其名を地より滅さん爲なり。義人は籲

ぶに、主は之を聴き、彼等を悉の憂より免かれしむ。主は心の傷める者に近し、靈の謙だる者を救はんとす。義人には憂多し、然れども主は之を悉く免しめん。主は彼が悉の骨を護り、其一も折れざらん。悪は罪人を殺し、義人を憎む者は亡びん。主は其の僕の靈を救ひ、彼を頼む者は一人も亡びざらん。

常に福にして全く玷なき生神女吾が神の母なる爾を福なりと稱ふるは眞に當れり、ヘルワイムより尊くセラフイムに並びなく榮え、貞操を壊らずして神言を生みし實の生神女たる爾を崇讃む。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、「アミン」。主憐めよ。三次福を降せ。

司祭發放詞を誦す。上記は大齋期の順序。

他の齋期で「アリルイヤ」の指定がある場合、『聖エフレムの祝文』（叩拜）の後、以下の通り。

【聖三祝文、至聖三者、天主經】

主憐めよ。十二次

「光榮は」「今も」、主憐めよ。三次、福を降せ。

司祭發放詞を誦す。

## 晩堂大課

司祭始めて誦す、

我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に。

誦經 「アミン」。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

天の王、慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、満たざる所なき者よ、萬善の寶藏なる者、生命を賜ふ主よ、來りて我等の中に居り、我等を諸の穢れより潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救ひ給へ。

【聖三祝文、至聖三者、天主經】

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天

におこな  
に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に  
おいめ  
債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等  
を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦經 「アミン」。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

來れ、我等の王・神に叩拜せん。

來れ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。

來れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

大齋第一（月曜から木曜）には第六十九聖詠を読み、クリトの大主教聖アンドレイの大カノンを行う。

### 第六十九聖詠

神よ、速に我を救へ、主よ、速に我を助け給へ。我が靈を求むる者は、願  
はくは耻を得て辱を受けん、禍を我に望む者は、願はくは退けられて嘲け  
られん。我に向ひて嘻嘻と云ふ者は、其我を辱しむるに因りて、願はくは退け

られん。凡そ爾を求むる者は、願はくは爾の爲に喜び樂まん、爾の救を愛する者は、願はくは常に神は大なりと云はん。我は貧しくして乏し、神よ、速に我に格り給へ、爾は私の助なり、我を救ふ者なり、主よ、遅はる母れ。

【アンドレイの大カノン】

大齋の第一週間以外には

第四聖詠

吾が義の神よ、我が籲ぶ時、我に聴き給へ。我が狹に在る時、爾我に廣を與へたり。我を憐みて、我が禱を聴き給へ。人の子よ、我が榮の辱しめらるること何の時に至るや、爾等虚を好み詭を求むること何の時に至るや。爾等主が其聖人を析ちて己に屬せしめしを知れ、我籲べば、主は之を聴く。忿りて罪を犯す母れ、榻に在るとき爾等の心に謀りて、己を鎮めよ。義の祭を献げて、主を待め。多くの者は言ふ、誰か我等に善を示さん。主よ、爾の顔の光を我等に顯し給へ。爾の我が心に樂を滿つるは、彼等が餅と酒と油とに豊なる時より勝れり。我安然として偃し寝ぬ、蓋主よ、獨爾は我に無難にして世を渡らしめ給ふ。

第六聖詠

主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する勿れ。主や、我

を憐み給へ、我弱ければなり、主よ、我を醫し給へ、我が骸は慄き、我が靈も甚慄  
けばなり、爾主よ、何の時に至るか。よ、面を轉へし、我が靈を免れしめ、爾  
の憐に由りて我を救ひ給へ。蓋死の中には爾を記憶するなし、墓の中には誰か爾  
を讃揚せん。我嘆にて憊れたり、毎夜我が榻を滌ひ、我が涙にて我の褥を濡す。我が眼  
は憂に因て枯れ、我が諸の敵に因りて衰へたり。凡そ不法を行ふ者は我を離れよ、  
蓋主は我が泣く聲を聞けり、主は我が願を聴き給へり、主は我が禱を納れんとす。願  
はくは我が諸の敵は辱しめられて痛く撃たれん、願はくは退きて俄に愧を得ん。

## 第十二聖詠

主よ、我を全く忘るること何の時に至るか、爾の面を我に隠すこと何の時に至る  
か、我が己の靈の中に謀り、心の中に日夜憂を懐くこと何の時に至るか、我が敵  
の我に高ぶること何の時に至るか。主我が神よ、顧みて我に聴き給へ、我が目を明  
にして、我を死の寐に寝ねざらしめ給へ、我が敵に我は彼に勝てりといはざらん爲、我  
を攻むる者が我の撼く時に喜ばざらん爲なり。我爾の憐を恃み、我が心爾の救  
を喜ばん、我恩を施すの主を讃め頌ひ、至上なる主の名を崇め歌はん。  
主我が神よ、顧みて我に聴き給へ、我が目を明にして、我を死の寐に寝ねざらしめ給  
へ、我が敵が我は彼に勝てりといはざらん爲なり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光榮は爾に歸す。三次、躬拜三次

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

## 第二十四聖詠

主や爾に我が靈を擧ぐ。吾が神や、爾を待む、我に世々愧なからしめよ。我が敵を我に勝ちて喜ばしむる母れ。凡そ爾を待む者にも愧なからしめ給へ。妄に法を犯す者は願くは愧を得ん。主や我に爾の道を示し、我に爾の路を訓へよ。我を爾の眞理に導て、我を訓へ給へ。蓋爾は我が救の神なり、我日々に爾を待めり。主や爾の鴻恩と爾の慈憐を記憶せよ、蓋是れ永遠よりあるなり。我が少き時の罪と過を記憶する母れ。主よ、爾の仁慈に依り爾の慈憐を以て我を記憶せよ。主は仁なり義なり。故に罪人に道を訓へ示す。謙遜の者を義に導き謙遜の者に己の道を訓ふ。凡そ主の道は其約と其啓示を守る者に在て慈憐なり、眞實なり。主や爾の名に因て我が罪を赦し給へ、其大なるを以てなり。誰か主を畏るる人たる。主は之に擇ぶべき道を示さん。彼の靈は福に居り、彼の裔は地を嗣がん。主の奥義は彼を畏るる者に屬し、彼は其約を以て彼等に顯はす。我が日常に主を仰ぐ、其我が足を網より出すに因る。我を顧み我

を憐れ、我獨にして苦めらるるに因る。我が心の憂益多し、我が苦難より我を  
引き出せ、我が困苦、我が勞瘁を顧み、我が諸の罪を赦し給へ。我が敵を觀よ、何  
ぞ多き、彼等が我を怨むの恨は何ぞ甚き。我が靈を護りて我を救ひ、我が爾に於  
る時に愧なからしめ給へ。願は無玷と義とは我を護らん、蓋我爾を待めばなり。神  
よ、イズライリを其諸の憂より救ひ給へ。

### 第三十聖詠

主や爾を待む、我に世々に愧なからしめよ。爾の義を以て我を免れしめ給へ。爾  
の耳を我に傾けて、速に我を免れしめよ、我が爲に磐石となり隱家となりて、我を救  
へ、蓋爾は我が石山、我が石垣なり、爾の名に依て、我を導き、我を治め給へ。竊  
に我が爲に設けたる網より我を引き出し給へ、蓋爾は私の固なり。我が神を爾の手  
に渡す、主眞理の神よ、爾曾て我を救へり。我虚しき偶像を尊む者を疾み、唯主を恃  
む。我爾の憐を歡び樂まん、蓋爾は我が禍を顧み、我が靈の憂を知り、我  
を敵の手に渡さず、我が足を廣き處に立てたり。主よ、我を憐れみ給へ、我狭きに居  
ればなり。我が目は憂に縁て枯れたり、我が靈も我が腹も亦然り。我が生命は悲の中  
に盡き、我が年は嘆の中に盡きたり、我が力は罪に依て弱り、我が骨は枯れたり。我  
は諸敵に因て、隣にも辱しめられ、知人には忌み憚られ、我を衢に見る者は我を避く。

我は死者の如く人の心に忘れられたり。我は壞られたる器の如し、蓋我は多人の誹  
を聞く、彼等が相議して我を攻め我が靈を抜かんことを計るとき、四方に惶れあり。主  
よ、我爾を待む。我謂ふ、爾は我の神なり。我が日は爾の手に在り、我を我が敵  
の手と我を攻る者より免れしめ給へ。爾の光る顔を爾の僕に顯し、爾の憐を以  
て我を救ひ給へ。主よ、我爾に呼ぶに由て、羞を得せしむる母れ。願くは無道の者は羞  
を蒙りて地獄に沈黙せん。願はくは傲と侮を以て、義人に向ふて、悪きを言ふ 謊の口  
は唾とならん。大なる哉、爾の恩、爾を畏るる者の爲に畜へ、爾を待む者の爲  
に、人の子の前に備へたる者や。爾は彼等を人の亂より爾が面の陰に庇ひ、彼等  
を舌の争より幕の中に隠す。主は崇め讃めらる。彼は己の妙なる憐を我に堅固な  
る城邑の中に顯したればなり。我が惑へる時我爾の目より絶れたりと思へり。然れど  
も、我爾に呼びし時、爾は我が祈の聲を聴き給へり。主の悉の義人は主を愛せよ、主  
は忠信の者を護り、傲慢の者には嚴く報ゆ。凡そ主を頼む者は勇め、爾等の心は固  
くなるべし。

### 第九十聖詠

至上者の覆の下に居る者は、全能者の蔭の下に安んず、主に謂ふ、爾は我の避所、我  
の防禦、我が頼む所の我の神なりと。彼は爾を獵者の網より、滅びの疫より脱れし

めん、彼は其羽にて爾を覆はん、其翼の下にて爾危からざるを得ん、彼の眞實は楯なり、鎧なり。爾は夜の震驚と晝の流矢、闇冥に行く行疫と正午に暴す瘴疫を懼れざらん。千人爾の側に、萬人爾の右に仆るれども、爾に近づかざらん。爾只目を注ぎて不虔の者の報いを見ん、蓋爾謂へり、主は我の恃なりと、爾至上者を選びて、爾の避所とせり。悪は爾に臨まず、疫癘は爾の住所に近づかざらん。蓋爾の為にその天使に命じて、爾の凡そ路に爾を護らしめん。彼等其手にて爾を抱へて、爾の足を石に蹶かざらしめん。爾蝮と毒蛇とを踐み、獅と大蛇とを踏まん。彼我を愛するに因て、我之を援けん、彼我の名を識るに因て、我之を衛らん。我を呼ばば、我彼に聽かん、憂の時我彼と偕にし、彼を援け、彼を榮せん、壽を以て彼に飽かしめ、我の救を彼に顕はさん。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、「アミン」。

アイルイヤ、アイルイヤ、アイルイヤ、神や、光榮は爾に歸す。 三次

主憐めよ。 三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、「アミン」。

齋時期には叩拜三次。

次の句は明るい声でゆっくり歌う。

右列の詠隊

神は我等と偕にす、異邦人よ、此を知りて從へよ、神我等と偕にすればなり。  
左列の詠隊、同じ句を繰り返す。

以下順序に従って、両詠隊一句ずつ交互に歌う。

地の極までも之を聴け、神我等と偕にすればなり。

権力ある者よ、從へ、神我等と偕にすればなり。

復勢を張らば、復敗られん、神我等と偕にすればなり。

謀を設けば、主は之を毀たん、神我等と偕にすればなり。

言を出さば、必成らざらん、神我等と偕にすればなり。

爾等の畏るる所は我等畏れず、驚かず、神我等と偕にすればなり。

主我が神を以て聖と爲す、彼は我が畏とならん、神我等と偕にすればなり。

我彼を頼まば必ず我を聖にせん、神我等と偕にすればなり。

我彼を望み、彼に因りて救を得ん、神我等と偕にすればなり。

視よ、我及び神が我に與へたる諸子は此に在り、神我等と偕にすればなり。

幽暗の中を行く民は大なる光を見たり、神我等と偕にすればなり。

死の蔭の地に居る者よ、光は爾等を照さん、神我等と偕にすればなり。

蓋けだし嬰おさなごは我等われらの爲ために生うまれ、子こは我等われらに賜たまはりたり、神我等かみわれらと偕ともにすればなり。

權柄けんべいは其肩そのかたに在あり、神我等かみわれらと偕ともにすればなり。

其和平そのわへいは終おわりなし、神我等かみわれらと偕ともにすればなり。

其名そのなは大おおなる議事ぎじの使者ししやと稱とへらる、神我等かみわれらと偕ともにすればなり。

神妙しんみょうなる議士ぎしと稱とへらる、神我等かみわれらと偕ともにすればなり。

大能だいのうの神かみ、主宰しゅざい、和平わへいの君きみと稱とへらる、神我等かみわれらと偕ともにすればなり。

來世らいせいの父ちちと稱とへらる、神我等かみわれらと偕ともにすればなり。

神かみは我等われらと偕ともにす、異邦人いほうじんよ、此これを知しりて從したがへよ、神我等かみわれらと偕ともにすればなり。

光榮こうえいは父ちちと子こと聖神せいしんに歸きす、神我等かみわれらと偕ともにすればなり。

今いまも何時いつも世世よよに、「アミン」、神我等かみわれらと偕ともにすればなり。

兩詠隊りうぎたい共に 神かみは我等われらと偕ともにす、異邦人いほうじんよ、此これを知しりて從したがへよ、神我等かみわれらと偕ともにすればなり。

【トロペリ】

主しゅよ、日ひを送おくりて爾なんじに感謝かんしゃす、救世主きゅうせいしゅよ、求もとむ、我われに罪つみなく暮くれと夜よるとを度わたらしめ  
て、我われを救すくひ給たまへ。

光榮こうえいは父ちちと子こと聖神せいしんに歸きす。

主宰よ、日を送りて爾を讚榮す、救世主よ、求む、我に誘なく暮と夜とを度らしめて、我を救ひ給へ。

今も何時も世世に、「アミン」。

聖なる者よ、日を送りて爾を讚頌す、救世主よ、求む、我に無難に暮と夜とを度らしめて、我を救ひ給へ。

無形の性のヘルワイムは息めざる歌にて爾を讚め揚げ、六翼の造物セラフイムは絶えざる聲にて爾を尊み歌ひ、天使の萬軍は聖三の歌にて爾を崇め讚む、蓋爾は萬有の先より自ら存する父にして、同無原なる爾の子を有ち、同尊なる生命の神を出し、三位の分れざるを顯し給ふ。

至聖なる童貞女・神の母と、親しく聖言を見て之に役めし者と預言者及び致命者の群よ、死せざる生命を有つに因りて、我等の爲に切に祈り給へ、我等皆苦難の中に在ればなり。願はくは我等凶悪の誘を遁れて、天使の歌を歌はん、聖、聖、聖なる三聖の主よ、我等を憐みて救ひ給へ、「アミン」。

我信われしんず一ひとつの神かみ・父ちち・全能者ぜんのうしや、天てんと地ち、見みゆると見みえざる萬物ばんぶつを造つくりし主しゆを。又また信しんず一ひとつの主しゆイイススハリストス、神かみの獨生どくせいの子こ、萬世よろずよの前に父ちちより生うまれ、光ひかりよりの光ひかり、眞まことの神かみよりの眞まことの神かみ、生うまれし者ものにて、造つくられしに非あらず、父ちちと一體いつたいにして、萬物ばんぶつ彼かれに造つくられ、我等われら人人ひとびとの爲ため、又また我等われらの救すくいの爲ために天てんより降くだり、聖神せいしん及び童貞女どうていじよマリヤより身みを取り、人ひとと爲なり、我等われらの爲ためにポンテイピラトの時とき十字架じゆうじかに釘くぎうたれ、苦くを受け、葬ほうむられ、第三日だいさんじつに聖書せいしよに應かなひて復活ふっかつし、天てんに升のぼり、父ちちの右みぎに坐ざし、光榮こうえいを顯あらわして生いける者と死しせし者とを審判しんぱんする爲ために還また來きたり、其國そのくに終おわりなからんを。又また信しんず聖神せいしん・主しゆ・生いのちを施ほどこす者もの、父ちちより出いで、父ちち及び子こと共に拜おがまれ、讚ほめられ、預言者よげんしやを以もつて嘗かつて言いひしを。又また信しんず一ひとつの聖せいなる公おおやけなる使徒しとの教會きやうかいを。我認われみとむ一ひとつの洗禮せんれいを以もつて罪つみの赦ゆるしを得うるを。我望われのぞむ死者ししやの復活ふっかつ、並ならびに來世らいせいの生命いのちを、「アミン」。

以下の句のうち最初の「至聖なる女幸よ」は三次、其他は二次歌う。

至聖しせいなる女幸じよさい生神女しょうしんじよよ、我等われら罪人ざいにんの爲ために祈いのり給たまへ。

聖天使せいてんし及び天使首てんししゆの全軍ぜんぐんよ、我等われら罪人ざいにんの爲ために祈いのり給たまへ。

聖預言者せいよげんしやイオアン、吾わが主しゆイイススハリストスの前ぜん驅授洗くじゆせんよ、我等われら罪人ざいにんの爲ために祈いのり給たまへ。

給たまへ。

光明なる聖使徒、預言者、致命者、及び諸聖人よ、我等罪人の爲に祈り給へ。

克肖捧神なる我が諸神父、全世界の牧者及び教師よ、我等罪人の爲に祈り給へ。

【本堂の聖人】至聖なる日本の大主教聖ニコライよ、我等罪人の爲に祈り給へ。

尊くして生命を施す十字架の敗られず量られざる聖なる力よ、我等罪人を離る勿れ。

神よ、我等罪人を浄め給へ。

神よ、我等罪人を浄めて、我等を憐み給へ。

【聖三祝文、至聖三者、天主經】

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、

聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天

に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦經 「アミン」。

○月水兩曜日には以下のトロパリを歌う、第二調、祭日には祭日のトロパリ。

ハリストス神よ、我が目を明にして、我を死の寐に寐ねざらしめ給へ、我が敵が我は彼に勝てりといはざらん爲なり。

光榮は父と子と聖神に歸す。

神よ、我が靈を扨ぎ衛る者となり給へ、我多くの網の中を行くに因る、仁慈の主よ、我を之より脱がれしめて救ひ給へ、爾人を愛する主なればなり。

今も何時も世世に、「アミン」。

生神・童貞女よ、我等夥しき罪ありて己の勇なきに因り、爾より生れし者に祈り給へ、蓋母の袴は多く主宰の慈憐を得べし。至淨の者よ、罪人の祈を斥くる勿れ、我等の爲に甘んじて苦を受け給ひし者は仁慈にして人を救ふことを能す

ればなり。

○火木曜日には以下のトロパリを歌う。第八調。

主よ、爾は我が見えざる敵の眠らざるを知り給へり、我を造りし者よ、爾は亦我が不当なる肉體の弱きを知り給へり、故に我が神を爾の手に託す、爾が仁慈の翼にて我を覆ひて、死の寐に寐ねざらしめ給へ、我が靈の目を明にして、爾の聖言を以て我が樂と爲し給へ、宜き時に我を興して、爾を讚榮せしめ給へ、爾獨仁慈にして人を愛する主なればなり。

句、主吾が神よ、顧みて我に聴き給へ。

主よ、爾の審判は何ぞ畏るべき、諸天使は前に立ち、衆人は引き入れられ、記録は披かれ、行は鞫べられ、意念は糾さるる時、我罪に於て生まれし者は何の判を受けんか、誰か我が爲に火を滅し、誰か我が爲に闇冥を照さん、主よ、我唯爾の憐を恃む、爾人を慈む主なればなり。

光榮は父と子と聖神に歸す、

神よ、昔罪ある女に涙を賜ひし如く、我にも涙を賜ひて、我を迷の路より救ひし爾の足を沾さしめ、痛悔を以て造られし我が清き生命を香しき膏として

爾なんじに獻ささげしめ給たまへ、我われも爾なんじの慕したふべき聲こえ、爾なんじの信しんは爾なんじを救すくへり、安あん然ぜんとして往ゆけと曰いふを聽きかん爲ためなり。

今いまも何いつ時つも世よ世よに、「アミン」。

生しやう神しん女じよよ、我われ爾なんじを辱はじを得えざる憑たのみ恃すとして救すくを得えん、至し淨じやうの者ものよ、爾なんじの轉てん達たつを得えて畏おそれざらん、爾なんじの覆おおいを鎧よろいの如ごとく衣き、爾なんじが有ゆう能のうの佑たすけ助すけを受けて、我わが敵てきを驅かり、之これに勝かたん、故ゆえに祈いのりて爾なんじに呼よぶ、女じよ宰さいよ、爾なんじの祈き禱とうを以もつて我われを救すくひ給たまへ、爾なんじより身みを取りし神かみの子この力ちからを以もつて我われを暗くらき眠ねむりより起おこして爾なんじを讚さん榮えいせしめ給たまへ。

主しゆ憐あわれめよ。四十次

光こう榮えいは父ちちと子こと聖せい神しんに歸きす、今いまも何いつ時つも世よ世よに、「アミン」。

へルワイムより尊とうく、セラフイムに並ならびなく榮さかえ、貞みさお操おを壞やぶらずして神かみ言ことばを生うみ實じつの

生しやう神しん女じよたる爾なんじを崇あがめ讚ほむ。

神しん父ぶや主しゆの名なを以もつて福ふくを降くだせ。

司し祭じ 主しゆイイスス・ハリストス我われ等らの神かみや、吾わが諸しよ聖せい神しん父ぶの祈き禱とうに依よりりて我われ等らを憐あわれめよ。

「アミン」。

【聖大ワシリイの祝文】

主よ、主よ、我等を晝の諸の流矢より脱れしめし者よ、我等を闇冥に行く諸の害より脱れしめ給へ。我が手を擧ぐるを晩の祭として受け給へ。我等に過なく、悪に誘はれずして、夜の路を過らしめ給へ。我等を悪魔より來る諸の紛擾と畏懼より脱れしめ給へ。我等の靈に感動を與へ、我等の心に畏るべき義なる爾の審判に對ふべきことを慮らしめ給へ。我等の體を爾を畏るる畏に釘うち給へ、我等が地に在る肉慾を殺し給へ。我等が眠の靜なる時にも爾の誠を見るに因りて照さるを得しめ給へ。我等より諸の妄想と害ある慾とを除き給へ。我等を祈祷の時に興して、我が信を固め、爾の誠を行ふに進ましめ給へ、爾が獨生子の慈憐と仁慈に因りてなり。爾は彼と至聖至仁生命を施す爾の神と偕に崇め讚めらる、今も何時も世世に、「アミン」。

來れ、我等の王・神に叩拜せん。叩拜一次

來れ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。叩拜一次

來れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。叩拜一次

### 第五十聖詠

神よ、爾の大なる憐に因りて我を憐み、爾が恵の多きに因りて我の不法を抹し給へ。

屢 我を我が不法より洗ひ、我を我が罪より清め給へ、蓋我は我が不法を知る、我の罪は常に我が前に在り。我は爾獨爾に罪を犯し、悪を爾の目の前に行へり、爾は爾の審断に義にして、爾の裁判に公なり。視よ、我は不法に於て妊まれ、我が母は罪に於て我を生めり。視よ、爾は心に眞實のあるを愛し、我が衷に於て智慧を我に顯せり。「イツソプ」を以て我に沃げ、然せば我潔くならん、我を滌へ、然せば我雪より白くならん。我に喜と樂とを聞かせ給へ、然せば爾に折られし骨は悦ばん。爾の顔を我が罪より避け、我が盡くの不法を抹し給へ。神よ、潔き心を我に造れ、正しき靈を我の衷に改め給へ。我を爾の顔より逐ふこと母れ、爾の聖神を我より取り上ぐること母れ。爾が救の喜を我に還せ、主宰たる神を以て我を固め給へ。我不法の者に爾の道を教へん、不虔の者は爾に歸らんとす。神よ、我が救の神よ、我を血より救ひ給へ、然せば我が舌は爾の義を讃め揚げん。主よ、我が唇を啓け、然せば我が口は爾の讚美を揚げん、蓋爾は祭を欲せず、欲すれば我之を獻らん、爾は燔祭を喜ばず。神に喜ばるる祭は痛悔の靈なり、痛悔して謙遜なる心は、神よ、爾輕んじ給はず。主よ、爾の恵に因りて恩をシオンに垂れ、イエルサリムの城垣を建て給へ。其時に爾義の祭、獻物と燔祭とを喜び饗けん、其時に人人爾の祭壇に犢を奠へんとす。

主<sup>しゅ</sup>や、我<sup>わ</sup>が<sup>い</sup>の<sup>り</sup>を<sup>き</sup>給<sup>たま</sup>へ。願<sup>ねが</sup>は我<sup>わ</sup>が呼<sup>よ</sup>ぶ聲<sup>こゑ</sup>は爾<sup>なんじ</sup>に至<sup>いた</sup>らん。爾<sup>なんじ</sup>の顔<sup>かんほせ</sup>を我<sup>われ</sup>に匿<sup>かく</sup>す母<sup>な</sup>れ。我<sup>わ</sup>が憂<sup>うれ</sup>い日<sup>ひ</sup>に爾<sup>なんじ</sup>の耳<sup>みみ</sup>を我<sup>われ</sup>に傾<sup>かた</sup>げ給<sup>たま</sup>へ。我<sup>わ</sup>が爾<sup>なんじ</sup>に呼<sup>よ</sup>ばん日<sup>ひ</sup>に速<sup>すみ</sup>やかに我<sup>われ</sup>に聆<sup>き</sup>き給<sup>たま</sup>へ。蓋<sup>けだ</sup>我<sup>わ</sup>が日<sup>ひ</sup>は煙<sup>けむり</sup>の如<sup>ごと</sup>く消<sup>き</sup>え、我<sup>わ</sup>が骨<sup>ほね</sup>は燼<sup>もえ</sup>の如<sup>ごと</sup>く焚<sup>や</sup>かれたり。我<sup>わ</sup>が心<sup>こころ</sup>は撃<sup>う</sup>たれて、草<sup>くさ</sup>の如<sup>ごと</sup>くに枯<sup>か</sup>れ、我<sup>われ</sup>は我<sup>わ</sup>が餅<sup>パン</sup>を食<sup>くら</sup>ふを忘<sup>わす</sup>るるに至<sup>いた</sup>る、我<sup>わ</sup>が呻<sup>さま</sup>吟<sup>いん</sup>の聲<sup>こゑ</sup>に依<sup>よ</sup>りて、我<sup>わ</sup>が骨<sup>ほね</sup>は我<sup>わ</sup>が肉<sup>にく</sup>に貼<sup>つ</sup>けり。我<sup>われ</sup>は野<sup>の</sup>に在<sup>あ</sup>る鶉<sup>う</sup>鶉<sup>う</sup>の如<sup>ごと</sup>く荒<sup>あ</sup>げらるるに我<sup>われ</sup>を誇<sup>そし</sup>り、我<sup>われ</sup>を恨<sup>うら</sup>みむ者<sup>もの</sup>は我<sup>われ</sup>を指<sup>さ</sup>して坐<sup>ざ</sup>するは屋<sup>や</sup>蓋<sup>ね</sup>にある孤<sup>はな</sup>鳥<sup>どり</sup>の如<sup>ごと</sup>し。我<sup>わ</sup>が敵<sup>てき</sup>は日<sup>ひ</sup>々に我<sup>われ</sup>を誇<sup>そし</sup>り、我<sup>われ</sup>を恨<sup>うら</sup>みむ者<sup>もの</sup>は我<sup>われ</sup>を指<sup>さ</sup>して誓<sup>ちか</sup>ふ。我<sup>われ</sup>は灰<sup>はい</sup>を餅<sup>パン</sup>の如<sup>ごと</sup>くに食<sup>くら</sup>ひ、我<sup>わ</sup>が飲<sup>のみ</sup>物<sup>もの</sup>に涙<sup>なみだ</sup>を和<sup>ま</sup>ふ。爾<sup>なんじ</sup>の怒<sup>いかり</sup>と爾<sup>なんじ</sup>の憤<sup>いきどおり</sup>に因<sup>よ</sup>りてなり、蓋<sup>けだ</sup>爾<sup>なんじ</sup>曾<sup>かつ</sup>て我<sup>われ</sup>を擧<sup>あ</sup>げ、復<sup>また</sup>我<sup>われ</sup>を墜<sup>お</sup>せり。我<sup>わ</sup>が日<sup>ひ</sup>は傾<sup>かた</sup>げる晷<sup>ひかげ</sup>の如<sup>ごと</sup>く、枯<sup>か</sup>れしこと草<sup>くさ</sup>の如<sup>ごと</sup>し。唯<sup>ただ</sup>主<sup>しゅ</sup>よ、爾<sup>なんじ</sup>は永<sup>なが</sup>く存<sup>ぞん</sup>ず。爾<sup>なんじ</sup>を記<sup>き</sup>憶<sup>おく</sup>するは世<sup>よ</sup>々に在<sup>あ</sup>り。爾<sup>なんじ</sup>起<sup>お</sup>きて憐<sup>あわれ</sup>みをシオンに垂<sup>た</sup>れん、蓋<sup>けだ</sup>之<sup>これ</sup>を憐<sup>あわれ</sup>む時<sup>とき</sup>至<sup>きた</sup>れり。蓋<sup>けだ</sup>時<sup>とき</sup>來<sup>きた</sup>れり、爾<sup>なんじ</sup>の僕<sup>ぼく</sup>は其<sup>その</sup>石<sup>いし</sup>をも愛<sup>あい</sup>し、其<sup>その</sup>塵<sup>ちり</sup>をも惜<sup>おし</sup>めばなり。諸<sup>しよ</sup>民<sup>みん</sup>は主<sup>しゅ</sup>の名<sup>な</sup>を畏<sup>おそ</sup>れ、地<sup>ち</sup>上<sup>じやう</sup>の諸<sup>しよ</sup>王<sup>わう</sup>は爾<sup>なんじ</sup>の光<sup>こう</sup>榮<sup>えい</sup>を畏<sup>おそ</sup>れん。蓋<sup>けだ</sup>主<sup>しゅ</sup>はシオンを建て、己<sup>おのれ</sup>が光<sup>こう</sup>榮<sup>えい</sup>の中<sup>うち</sup>に顯<sup>あら</sup>われん。無<sup>た</sup>憑<sup>よりなきもの</sup>者<sup>もの</sup>の袴<sup>いのり</sup>を顧<sup>かへ</sup>りて、其<sup>その</sup>願<sup>ねが</sup>いを輕<sup>かろ</sup>んぜざらん。是<sup>こ</sup>れ後<sup>のち</sup>の世<sup>よ</sup>の爲<sup>ため</sup>に記<sup>しる</sup>され、未<sup>み</sup>來<sup>らい</sup>の民<sup>たみ</sup>は主<sup>しゅ</sup>を崇<sup>あが</sup>め讚<sup>ほ</sup>めん。蓋<sup>けだ</sup>彼<sup>かれ</sup>は其<sup>その</sup>聖<sup>せい</sup>なる高<sup>たか</sup>き所<sup>ところ</sup>より俯<sup>ふ</sup>し臨<sup>のぞ</sup>み、主<sup>しゅ</sup>は天<sup>てん</sup>より地<sup>ち</sup>を鑿<sup>かん</sup>みたり、俘<sup>とりこ</sup>の呻<sup>さま</sup>吟<sup>いん</sup>を聞<sup>き</sup>きて死<sup>し</sup>の子<sup>こ</sup>を解<sup>と</sup>かん爲<sup>ため</sup>、彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>が主<sup>しゅ</sup>の名<sup>な</sup>をシオンに傳<sup>つた</sup>え、其<sup>その</sup>譽<sup>ほまれ</sup>をイエルサリムに知<sup>し</sup>らさんが爲<sup>ため</sup>なり、是<sup>こ</sup>れ諸<sup>しよ</sup>民<sup>みん</sup>諸<sup>しよ</sup>國<sup>こく</sup>が均<sup>ひと</sup>く集<sup>あつ</sup>まりて、主<sup>しゅ</sup>に事<sup>つか</sup>へん時<sup>とき</sup>に在<sup>あ</sup>り。彼<sup>かれ</sup>は途<sup>とち</sup>中<sup>ちゆう</sup>に於<sup>お</sup>いて我<sup>わ</sup>が力<sup>ちから</sup>を弱<sup>よわ</sup>くし、我<sup>わ</sup>が日<sup>ひ</sup>を短<sup>みじ</sup>くせり。我<sup>われ</sup>謂<sup>い</sup>へり。吾<sup>わ</sup>

が神よ、我が日の半に於て我を取上ること母れ。爾の年は世々に在り。主や爾初に地を基けたり、天も爾が手の造工なり。彼等は亡びん、唯爾は永く存す、此等は皆衣の如く古び、爾衣服の如く之を更へ、此等は易らん、然れども、爾は易らず。爾の年は終らざらん。爾の諸僕の子は生存へ、其裔は爾が顔の前に堅く立たん。

【イウデヤ王マナシヤの祝文】

主全能者、吾が先祖アウラム、イサアク、イアコフ、及び其義なる裔の神よ、爾は天地と其都ての飾とを作り、爾が誠の言にて海を縛り、淵を閉ぢ、畏るべくして榮えたる爾の名を以て之を封印せり、萬物は其名を恐れ、爾が力の前に戦く、蓋爾が光榮の莊嚴なる前には誰も立つ能はず、罪人に於ける爾の厳しき怒は堪へ難し、然れども爾が契約の憐は測り難く、窮め難し、蓋爾は仁慈にして寛忍、鴻恩にして人の罪惡を憂ふる至上の主なり。爾主よ、爾が仁慈の多きに依りて、爾の前に罪を犯しし者に痛悔と赦罪とを契約し、爾が慈憐の多きに依りて、罪人の爲に痛悔を定めて救を得しめ給へり。故に爾主、義人の神よ、義にして爾の前に罪を犯さざりしアウラム、イサアク、イアコフの爲には痛悔を立てず、乃我罪人の爲に之を立て給へり、蓋我罪を犯ししこと海の砂の數よりも多し。主よ、我が不法は數へ難し、我が不法は數へ難し、我は不義の多きに因りて、仰

ぎて天の高きを見るに堪へず。我は多くの鐵の鎖にて屈められ、我が首を擧ぐる能はず、暫時も安んずる能はざるに至れり、蓋我は爾を怒らせ、悪を爾の前に犯し、爾の旨に循はず、爾の命を守らず、穢れし事を行ひ、誘惑を多く爲せり。今我が心の膝を屈めて、爾に仁慈を賜ふを祈る。主よ、我罪を犯せり、我罪を犯せり、我は我が不法を知る、然れども爾に祈りて求む、主よ、我を赦し給へ、我を赦し給へ、我を我が不法と共に亡す勿れ、永く我が悪を念ふ勿れ、我を地獄に定むる勿れ。蓋神よ、爾は痛悔する者の神なり、爾の仁慈を傾けて我が上に顯し、爾の大なる隣に因りて我不當の者を救ひ給へ、我生ける中爾を崇め讃めん、蓋天の衆軍は爾を讃め頌ふ、光榮は爾に世世に歸す、「アミン」。

【聖三祝文、至聖三者、天主經】

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。  
至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。 三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦經 「アミン」。

【トロパリ】 第六の調

主よ、我等を憐めよ、我等を憐めよ、我等を憐めよ、我等罪人何を言ふべきを知らず、唯此の祈祷を爾主宰に獻げて曰ふ、我等を憐めよ。

光榮は父と子と聖神に歸す。

主よ、我等を憐めよ、我等爾を恃めばなり、我等を痛く怒る勿れ、我等の不法を憶ふ勿れ、今も仁慈なるに因りて憐を垂れ、我等を諸の敵より救ひ給へ、爾は我等の神にて、我等は爾の民なり、皆爾の手の作れる者にて、爾の名を籲ぶに因る。

今も何時も世世に、「アミン」。

讚美たる生神女よ、我等の爲に憐の門を開け、爾を恃む者に亡ぶることなく、  
爾に依りて禍を遑るを得しめ給へ、爾ハリストスの民の救なればなり。

主憐めよ。四十次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

ヘルワイムより尊く、セラフイムに並なく榮え、貞操を壞らずして神言を生みし實の

生神女たる爾を崇讚む。

神父や、主の名を以て福を降せ。

司祭 主イイスス・ハリストス我等の神や、吾が諸聖神父の祈禱に依て我等を憐めよ。

「アミン」。

祝文

誦經 主宰神父全能者、主獨生の子イイススハリストス、及び聖神、惟一の神性、惟一の能力よ、我罪人を憐み、爾が知る所の法を以て我不當の僕を救ひ給へ、蓋爾は世世に崇め讚めらる、「アミン」。

來れ、我等の王・神に叩拜せん。叩拜一次  
來れ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。叩拜一次  
來れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。叩拜一次

第六十九聖詠

神や、速に我を救へ、主や、速に我を助け給へ。我が靈を求むる者は、願はくは恥を得て辱を受けん、禍を我に望む者は、願はくは退けられて嘲られん。我に向て嘖々と云ふ者は、其我を辱むるに因て、願はくは退けられん。凡そ爾を求むる者は、願はくは爾の爲に喜び樂ん、爾の救を愛する者は、願はくは常に神は大なりと言はん。我は貧くして乏し、神や、速に我に格り給へ、爾は私の助けなり、我を救ふ者なり、主や、遅はる勿れ。

第四百十二聖詠

主や、我が禱を聆けよ、爾の眞實に依て我が願に耳を傾けよ、爾の義に依て我に聴き給へ。爾の僕と訟を為す母れ、蓋凡そ生命ある者は、一も爾の前に義とせられざらん。敵は我が靈を逐い、我が生命を地に蹂り、我を久く死する者の如く暗きに居らしむ、我が靈は私の哀に悶え、我が心は私の哀に曠きが如し。

我古の日を想ひ、凡そ爾の行ひしことを考へ、爾が手の工作を計る。我が手を伸べて爾に向ひ、我が靈は渴きし地の如く爾を慕う。主や、速に我に聴き給へ、我が靈は衰へたり、爾の顔を我に隠す母れ、然らずば我は墓に入る者の如くならん。我に夙に爾の憐を聴かしめ給へ、我爾を頼めばなり。主や、我に行くべき途を示し給へ、我が靈を爾に擧ればなり。主よ、我を我が敵より救ひ給へ、我爾に趨附く。我に爾の旨を行ふを教へ給へ、爾は我の神なればなり、願はくは爾の善なる神は我を義の地に導かん。主よ、爾の名に依て我を生かし給へ、爾の義に依て我が靈を苦難より出し給へ、爾の憐を以て我が敵を滅し、凡そ我が靈を攻る者を夷げ給へ、我は爾の僕なればなり。

至高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人には恵臨めり。主天の王、神父全能者よ、主獨生の子イイススハリストス、及び聖神よ、爾の大なる光榮に因りて、我等爾を崇め、爾を讚め揚げ、爾を伏し拜み、爾を尊み歌ひ、爾に感謝す。主神よ、神の羔、父の子、世の罪を任ひし者よ、我等を憐み給へ、世の諸の罪を任ひし者よ、我等の禱を納れ給へ。父の右に坐する者よ、我等を憐み給へ。爾は獨聖なり、爾は獨主イイススハリストス、神父の光榮を顯す者なればなり、「ア

ミン」。

我<sup>われ</sup>夜<sup>や</sup>に 爾<sup>なんじ</sup>を 讚<sup>ほ</sup>め 揚<sup>あ</sup>げ、 爾<sup>なんじ</sup>の 名<sup>な</sup>を 世<sup>よ</sup>世<sup>よ</sup>に 崇<sup>あ</sup>め 歌<sup>うた</sup>はん。

主<sup>しゅ</sup>よ、 爾<sup>なんじ</sup>は 世<sup>よ</sup>世<sup>よ</sup>に 我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>の 避<sup>かく</sup>れ 所<sup>が</sup>たり。 我<sup>われ</sup>曾<sup>かつ</sup>て 言<sup>い</sup>へり、 主<sup>しゅ</sup>よ、 我<sup>われ</sup>を 憐<sup>あ</sup>われ み、 我<sup>わ</sup>が 靈<sup>たま</sup>を 醫<sup>い</sup>し 給<sup>たま</sup>へ、 我<sup>われ</sup>罪<sup>つみ</sup>を 爾<sup>なんじ</sup>に 得<sup>え</sup>た れば なり。 主<sup>しゅ</sup>よ、 爾<sup>なんじ</sup>に 趨<sup>は</sup>し 附<sup>つ</sup>く、 爾<sup>なんじ</sup>の 旨<sup>むね</sup>を 行<sup>お</sup>こな せ 我<sup>われ</sup>に 教<sup>おし</sup>へ 給<sup>たま</sup>へ、 爾<sup>なんじ</sup>は 我<sup>われ</sup>の 神<sup>かみ</sup>、 生<sup>いの</sup>命<sup>ち</sup>の 源<sup>みな</sup>も 爾<sup>なんじ</sup>に 在<sup>あ</sup>れば なり、 我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup> 爾<sup>なんじ</sup>の 光<sup>ひかり</sup>に 於<sup>お</sup>い 光<sup>ひかり</sup>を 觀<sup>み</sup>ん。 憐<sup>あ</sup>われ みを 爾<sup>なんじ</sup>を 知<sup>し</sup>る 者<sup>もの</sup>に 恒<sup>つね</sup>に 垂<sup>た</sup>れ 給<sup>たま</sup>へ。

主<sup>しゅ</sup>よ、 我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>を 守<sup>まも</sup>り、 罪<sup>つみ</sup>な く して 此<sup>こ</sup>の 夜<sup>よ</sup>を 度<sup>わた</sup>ら せ 給<sup>たま</sup>へ。 主<sup>しゅ</sup>吾<sup>わ</sup>が 先<sup>せん</sup>祖<sup>ぞ</sup>の 神<sup>かみ</sup>よ、 爾<sup>なんじ</sup>は 崇<sup>あ</sup>め 讚<sup>ほ</sup>め られ、 爾<sup>なんじ</sup>の 名<sup>な</sup>は 世<sup>よ</sup>世<sup>よ</sup>に 尊<sup>と</sup>う 歌<sup>うた</sup>はる、 「アミン」。

主<sup>しゅ</sup>よ、 爾<sup>なんじ</sup>を 恃<sup>た</sup>む に 因<sup>よ</sup>りて、 爾<sup>なんじ</sup>の 憐<sup>あ</sup>われ みを 我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>に 垂<sup>た</sup>れ 給<sup>たま</sup>へ。 主<sup>しゅ</sup>よ、 爾<sup>なんじ</sup>は 崇<sup>あ</sup>め 讚<sup>ほ</sup>め らる、 爾<sup>なんじ</sup>の 誠<sup>せい</sup>を 我<sup>われ</sup>に 訓<sup>おし</sup>へ 給<sup>たま</sup>へ。 主<sup>しゅ</sup>宰<sup>さい</sup>よ、 爾<sup>なんじ</sup>は 崇<sup>あ</sup>め 讚<sup>ほ</sup>め らる、 爾<sup>なんじ</sup>の 誠<sup>せい</sup>を 我<sup>われ</sup>に 悟<sup>さと</sup>ら せ 給<sup>たま</sup>へ。 聖<sup>せい</sup>なる 者<sup>もの</sup>よ、 爾<sup>なんじ</sup>は 崇<sup>あ</sup>め 讚<sup>ほ</sup>め らる、 爾<sup>なんじ</sup>の 誠<sup>せい</sup>に て 我<sup>われ</sup>を 照<sup>て</sup>ら 給<sup>たま</sup>へ。 主<sup>しゅ</sup>よ、 爾<sup>なんじ</sup>の 憐<sup>あ</sup>われ みは 世<sup>よ</sup>世<sup>よ</sup>に 在<sup>あ</sup>り、 爾<sup>なんじ</sup>の 手<sup>て</sup>の 造<sup>つく</sup>り し 物<sup>もの</sup>を 棄<sup>す</sup>つ る 勿<sup>な</sup>れ。 讚<sup>ほ</sup>め らる 爾<sup>なんじ</sup>に 歸<sup>き</sup>し、 歌<sup>うた</sup>は 爾<sup>なんじ</sup>に 歸<sup>き</sup>し、 光<sup>こう</sup>榮<sup>えい</sup>は 爾<sup>なんじ</sup>父<sup>ちち</sup>と 子<sup>こ</sup>と 聖<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>に 歸<sup>き</sup>す、 今<sup>いま</sup>も 何<sup>い</sup>時<sup>つ</sup>も 世<sup>よ</sup>世<sup>よ</sup>に、 「アミン」。

【その日に記憶される聖人のカノン、または八調経から生神女のカノン】

【聖三祝文、至聖三者、天主経】

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、

聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天

に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に

債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等

を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦經 「アミン」。

以下の句を朗々と歌う。第六調。

右列詠隊 萬軍の主よ、我等と偕にせよ、爾の外我が憂の時に助くる者なし、萬軍

の主よ、我等を憐み給へ。

左列詠隊 萬軍の主よ、我等と偕にせよ、爾の外我が憂の時に助くる者なし、萬軍の主よ、我等を憐み給へ。

右 神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ。

萬軍の主よ、我等と偕にせよ、爾の外我が憂の時に助くる者なし、萬軍の主よ、我等を憐み給へ。

左 其權能に依りて彼を讃め揚げよ、其至嚴なるに依りて彼を讃め揚げよ。

萬軍の主よ、我等と偕にせよ、爾の外我が憂の時に助くる者なし、萬軍の主よ、我等を憐み給へ。

右 角の聲を以て彼を讃め揚げよ、琴と瑟とを以て彼を讃め揚げよ。

萬軍の主よ、我等と偕にせよ、爾の外我が憂の時に助くる者なし、萬軍の主よ、我等を憐み給へ。

左 鼓と舞とを以て彼を讃め揚げよ、絃と簫とを以て彼を讃め揚げよ。

萬軍の主よ、我等と偕にせよ、爾の外我が憂の時に助くる者なし、萬軍の主よ、我等を憐み給へ。

右 和聲の鉞を以て彼を讃め揚げよ、大聲の鉞を以て彼を讃め揚げよ。凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ。

萬軍の主よ、我等と偕にせよ、爾の外我が憂の時に助くる者なし、萬軍の主よ、我等を憐み給へ。

兩詠隊共に歌う 神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ。

萬軍の主よ、我等と偕にせよ、爾の外我が憂の時に助くる者なし、萬軍の主よ、我等を憐み給へ。

光榮は父と子と聖神に歸す。

主よ、若し我等の爲に祈る爾の聖者と、我等を憐む爾の慈憐あらずば、我等如何で爾諸天使より恒に讚榮せらるる主を讚め歌ふを得ん、心を知る者よ、我等の靈を宥め給へ。

今も何時も世世に、「アミン」。

生神女よ、我が罪は甚多し、淨き者よ、爾に趨り附きて救を求む、獨讚美せらるる者よ、我が病める靈を顧みて、爾の子吾が神に我が行ひし罪惡の赦を賜はんことを祈り給へ。

至聖なる生神女よ、我が生ける中我を棄つる勿れ、我を人の轉達に委ぬる勿れ、乃親ら我を護りて救ひ給へ。

神の母よ、我が恃を以て盡く爾に負はしむ、願はくは我を爾の覆の下に守り

給へ。

主 憐めよ 四十次

何の日の時にも、天にも地にも叩拜讚榮せられ、寛忍、鴻慈、至善にして、義人を愛し、罪人を憐み、來世の福を約して、萬の者を救に招くハリストス神よ、爾主よ、親ら我が此の時の禱をも受け、我等の生命を爾の誠に向はしめ給へ、我等の靈を聖にし、體を潔くし、慮を直くし、思を淨くし、我等を悉くの憂と禍と疾より救ひ、爾の聖なる天使を以て我等を環り、我等が其圍に衛り導かれて、信の一なると爾の近づき難き光榮を悟るに至らせ給へ、蓋爾は世世に崇め讚めらる、「アミン」。

主 憐めよ。 三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

ヘルワイムより尊く、セラワイムに並なく榮え、貞操を壞らずして神言を生みし實の生神女たる爾を崇め讚む。

神父よ、主の名を以て福を降せ。

司祭 神よ、我等に恩を被らせ、我等に福を降し、爾の顔を以て我等を照し、並

に我等を憐み給へ。

司祭聖エフレムの祝文を誦す。

主吾が生命の主宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に與ふる勿れ。 叩拜

一次

貞潔と、謙遜と、忍耐と、愛の情を我爾の僕に與へ給へ。 叩拜一次

嗚呼主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざるを賜へ、蓋爾は世世に崇め讃めらる、「アミン」。 叩拜一次

又躬拜すること六次、毎次黙誦

神よ、我罪人を淨め給へ。

後再全文を誦す、

主吾が生命の主宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に與ふる勿れ。 貞潔と、謙遜と、忍耐と、愛の情を我爾の僕に與へ給へ。 嗚呼主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざるを賜へ、蓋爾は世世に崇め讃めらる、「アミン」。 叩拜

一次

【聖三祝文、至聖三者、天主經】

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。 三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。 三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦經 「アミン」。

主憐めよ。 十二次

【至聖生神女に祈るの祝文】エワエルゲティダ譯すれば恩女修道院の修士パウエルの原文

穢なく、誘はるるなく、朽つるなくして、至りて潔く、清き童貞女、神の嫁・女宰よ、最榮えたる産にて神言を人に合せ、天に離れたる我が性を復天に合せし者よ、

望なき者の獨の望と、戦ふ者の援よ、趨り附く者の爲に備へたる衛と、衆  
 「ハリスティアニン」の避所なる者よ、我不潔なる罪人、汚れたる思と言と行  
 にて己を全く不當の者と爲し、情れる心にて世の樂の奴隸と爲りし者を厭ふ  
 勿れ、乃仁慈なる神の母たるに因りて、人を愛する心を以て、我罪人不潔なる者  
 を憐み、我が汚れたる口より爾に捧ぐる祈禱を納れ、母たる勇を以て、爾の子、  
 吾が主宰及び神に禱り給へ、彼が我が爲に其仁慈の懷を開き、我が數へ難き罪過  
 を思はずして、我を痛悔に向はしめ、其誠を行ふに鍊達なる者と爲さん爲なり。  
 隣深く、慈廣く、善を愛するに因りて、此の生に於ける熱心の轉達者及び  
 扶助者よ、爾恒に我が前に立ちて、我を攻むる諸敵を退け、我を救に導き、  
 我が堪えざる靈を臨終の時に守り、凶悪なる魔鬼の醜き像を遠く我より逐ひ、  
 畏るべき審判の日に我を永遠の苦より脱れしめ、我を爾の子吾が神の言ひ難き  
 光榮を嗣ぐ者と爲し給へ、吾が女宰、至聖なる生神女よ、願はくは我之を得ん、爾  
 の轉達と守護と、爾の子吾が主神救世主イイススハリストスの恩寵と仁慈に因  
 りてなり。悉くの光榮、尊貴、伏拜は彼と、彼の無原の父と、至聖至仁生命を施  
 す彼の神とに歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

主宰よ、我等眠らんとする者に體と靈との休息を與へ給へ。我等を罪の闇き眠  
と、諸の夜中の味き安逸より守り、諸慾の動くを抑へ、悪敵が我等を欺きて射  
る所の火箭を滅し、我が肉體の鬪を鎮め、諸の地上物體の慮を斷たしめ給  
へ。神よ、我等に儆醒の智慧、貞潔の思、醒めたる心、安き眠、「サタナ」よ  
り來る邪なる夢なきを賜ひ、我等を祈祷の時に興して、爾の誠を行ふに固め、  
爾の律を恒に我が中心に思はしめ、徹夜の讚美を我等に賜ひて、爾父と子と  
聖神の最尊くして嚴なる名を尊み歌ひ、崇め讚めさせ給へ、今も何時も世世に、  
「アミン」。

【聖イオアンニキイの祝文】

至榮なる永貞童女ハリストス神の母よ、我等の祈祷を爾の子吾が神に攜へ、爾  
に藉りて我等の靈を救はしめ給へ。

我が憑持は父、我が避所は子、我が幷幪は聖神なり、聖三者よ、光榮は爾に歸す。

司祭 ハリストス神、我等の憑持よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

詠隊 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

主憐め、主憐め、主憐めよ。福を降せ。

この時、全員地に俯伏し、司祭は彼らに向つて以下の祝文を声に出して読む。

主宰大仁慈なる主イエススハリストス我等の神よ、至浄なる我等の女宰・生神女  
・永貞童女マリヤの禱と、生命を施す尊き十字架の力と、無形なる尊き天軍、  
光榮なる尊き預言者・前驅・授洗イオアン、光榮にして讚美たる聖使徒、光榮な  
る凱旋の聖致命者、克肖捧神なる吾が諸神父、聖にして義なる神の祖父イオア  
キム及びアンナ、及び爾が悉くの聖人の轉達に因りて、我等の祈禱を聆き納れ、  
我等に罪過の赦を賜ひ、我等を爾が翼の蔭に覆ひ、諸の仇敵を我等より遠ざ  
け、我等の生命を平安ならしめ給へ、主よ、我等と爾の世界とを憐み、并に我等  
の靈を救ひ給へ、爾は善にして人を愛する主なればなり。

終了後全員起立し、司祭は連禱を誦する。

我が国の天皇及び国を司る者の爲に禱らん。 詠隊 主憐めよ。(以下同様に繰り返す)  
教會を司る我等の主教及び、ハリストスに於ける我等の悉くの兄弟の爲、  
我等を恨み、及び我等を愛する者の爲、  
我等を憐み、及び我等に務むる者の爲、  
我等不當の者に己に代りて祈るを頼みし人人の爲、  
擲となりし者の救はれん爲、  
他出せる我等の諸父兄弟の爲、

海を航る者の爲、

病に臥す者の爲に禱らん。

又地の果の豊ならん爲、

及び悉くの正教の「ハリステイアニン」の靈の爲に禱らん。

敬虔の諸王、正教の諸主教、及び此の聖堂の建立者、我等の父母、已に過ぎ去

りし我等の悉くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者を記憶し

て、彼等の爲にも曰はん、

詠隊 主憐め、主憐め、主憐めよ。

司祭 主イイススハリストス我等の神よ、吾が諸聖神父の祈祷に依りて我等を憐み

給へ。

詠隊 「アミン」。

# 八調經抄

主日の八調の復活トロパリ、生神女讃詞、應答歌、復活コンダク

## 第一調

### 【復活トロパリ】

救世主よ、イウデヤの人墓を封じて、兵卒爾の潔き軀を守る時、爾は三日目に復活して、世界に生命を賜へり。故に天軍は爾生命を施す主に呼べり、ハリストスよ、光榮は爾の復活に歸し、光榮は爾の國に歸す、獨人を慈む主よ、光榮は爾の慮に歸す。

### 光榮、今も【生神女讃詞】

童貞女よ、ガウリイルが爾に慶べよと告げし時、其聲に従ひて萬有の主宰は爾聖なる約櫃に身を取り給へり、義なるダワイドの言ひしが如し。爾の造成主を妊みて、爾は天より廣き者と現れたり。光榮は爾に入りし者に歸し、光榮は爾より出でし者に歸し、光榮は爾の産にて我等を釋き給ひし者に歸す。

### 【應答歌】

盜賊の悔は樂園を奪ひ、攜香女の哀は喜を知らせたり、蓋爾、ハリストス神よ、

復活して、世界に大なる憐を賜へり。

【復活コンダク】

主宰よ、爾は神なるに因りて光榮の中に墓より復活し、世界をも共に復活せしめ給へり。人の性は爾を神として讃め歌ひ、死は滅され、アダムは樂しみ、エワは今縛より釋かれて、歡びて呼ぶ、ハリストスよ、爾は衆人に復活を賜ふ主なり。

第二調

【復活トロパリ】

死せざる生命よ、爾死に降りし時、神の性の光にて地獄を殺せり。死せし者を地下より復活せしめし時、天軍皆呼びて曰へり、生命を賜ふ主ハリストス吾が神よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も【生神女讃詞】

生神女よ、爾の奥義は皆智慧に超ゆ、皆至榮なり。貞潔の封ぜられ、童貞の守らるるに、爾は實の母と知られて、眞の神を生み給へり。彼に我等の靈の救はれんことを祈り給へ。

【應答歌】

ハリストス神よ、苦難の後、女等墓に往きて、爾の身に香料を傳らんとせしに、

天使等を墓の中に見て驚けり、蓋彼等の言ふを聴けり、主は復活して、世界に大なる憐を賜へり。

【復活コンダク】

全能の救世主よ、爾墓より復活せしに、地獄は奇蹟を見て慄き、死者は起き、造物は見て爾と偕に喜び、アダムは共に樂しみ、我が救世主よ、世界は常に爾を讚め歌ふ。

第三調

【復活トロパリ】天に在る者樂しめよ、地に在る者悦べよ、主は其臂の力を顯して、死を以て死を滅し、復活の首となり、我等を地獄の腹より救ひ、世界に大なる憐を賜ひたればなり。

光栄、今も【生神女讃詞】

生神童貞女よ、我等は爾我が族の救の爲に轉達する者を讚め歌ふ、爾の子吾が神は人を愛するに因りて、爾より取りし身にて十字架の苦を受け、我等を滅凶より救ひたればなり。

【應答歌】

顯現にて驚かし、言語にて慰むる光明の天使は攜香女に言へり、何ぞ生ける者を墓に尋ぬる、墓を空しくせし者は興きたり。彼が朽壞を變へて親ら變らざる者なるを悟りて、神に謂へ、爾の所爲は何ぞ驚くべき、人の族を救ひ給ひしに因る。

#### 【復活コンダク】

慈憐なる主よ、爾は今墓より復活して、我等を死の門より升せ給へり。今アダムは樂しみ、エワは歡び、諸預言者は列祖と偕に絶えず爾の權柄の神聖なる能力を讚め歌ふ。

#### 第四調

#### 【復活トロパリ】

主の女弟子は復活の光る音を天使より聞き受けて原祖よりの定罪を振り棄て、使徒に誇りて曰へり、死は滅され、ハリストス神は復活して、世界に大なる憐を賜へり。

#### 光栄、今も【生神女讚詞】

是れ古世より隠されて、天使等にも知られざる祕密なり、生神女よ、爾に藉りて神

は混ぜざる合一を以て身を取りて、地に在る者に現れ、甘じて我等の爲に十字架を受け、此を以て始に造られし者を復活せしめて、我等の靈を死より救ひ給へり。

【應答歌】

ハリストスよ、爾の至榮なる復活に魁せし攜香女は、使徒等に爾が神として復活し、世界に大なる憐を賜ひしを傳へたり。

【復活コンダク】

我が救世主及び贖罪主は神として地に生れし者を桎梏より釋きて、墓より復活せしめ、地獄の門を破りて、主宰として三日目に復活し給へり。

第五調

【復活トロパリ】

信者よ、父と聖神と偕に始なき言、吾が救の爲に童貞女より生れし者を讃め歌ひて拜むべし、彼甘じて其身にて十字架に上り、死を忍び其光榮の復活にて死せし者を復活せしめ給ひしに因る。

光榮、今も【生神女讃詞】

通られぬ主の門よ、慶べ、爾に趨り附く者の垣牆と幘幘よ、慶べ、穩なる湊よ、婚姻

を識らずして、身にて爾の造成主及び神を生みし者よ、慶べ。爾の産を讃め歌ひて拜む者の爲に息めずして禱り給へ。

【應答歌】

天使の顯見にて心驚かさされ、神妙の復活にて靈照さるる攜香女は使徒に福音せり、異邦の中に復活を傳へよ、主は奇跡を以て佑けん、我等に大なる憐を賜ふ主なればなり。

【復活コンダク】

我が救世主、人を愛する主よ、爾は地獄に降り、全能者として其門を壞り造成主として死者を己と偕に復活せしめ、死の刺を折き、アダムを詛より釋き給へり。故に我等皆呼ぶ、主よ、我等を救ひ給へ。

第六調

【復活トロバリ】

天使の軍爾の墓に現れしに、番兵死せし者の如し、マリヤ墓に立ちて、爾の潔き體を尋ねたり。爾は地獄に誘はれずして、地獄を虜にし、生命を賜ふ者として、處女に逢ひ給へり。死より復活せし主よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も【生神女讃詞】

爾なんじは恩寵おんちようを蒙こうむれる者ものを己おのれの母ははと名なづけて、自由じゆうの望のぞみを以もつて苦くるしみの爲ために來きたり、アダムを尋たずねんと欲ほつして、十字架じゆうじかの上うえに輝かがやきて、天使等てんしちうに謂いへり、我われと共に喜よろこべ、蓋失けだしうしなはれし金銭ドラフマは獲えられたりと。智慧ちえを以もつて萬事ばんじを治おさめし我等われらの神かみよ、光榮こうえいは爾なんじに歸きす。

【應答歌】  
イバコイ

ハリストスよ、爾なんじは神かみなるにより、生命いのちを施ほどこす自由じゆうの死しにて地獄じじくの門もんを破やぶりて、我等われらの爲ために古いにしえの樂園らくえんを開ひらき、死しより復活ふっかつして、我等われらの生命いのちを朽壞きゆうかいより救すくひ給たまへり。

【復活コンダク】

生命いのちの原因げんいんたるハリストス神かみは生命いのちを施ほどこす手てを以もつて死しせし者ものを暗くらき谷たにより出い出して、復活ふっかつを人類じんるいに賜たまへり、衆人しゆうじんの救世主きゆうせいしゆ、復活ふっかつと生命いのち、及び衆人しゆうじんの神かみなればなり。

第七調

【復活トロバリ】

ハリストス神かみよ、爾なんじは十字架じゆうじかにて死しを滅ほつし、盜賊とうぞくの爲ために樂園らくえんを開ひらき、攜けい香女かうじよの悲かなしみを慰なぐさめ、使徒しとに爾なんじが復活ふっかつして世界せかいに大おほいなる憐あわれみを賜たまひしを傳つたへさせ給たまへり。

光榮、今も【生神女讚詞】

讚美さんびたる者ものよ、爾なんじ我が復活ふっかつの寶藏ほうざうとして、爾なんじを頼たのみむ者ものを諸罪しよざいの穴あな及び淵おほより引ひき上あ

げ給へ。蓋爾生む前に、童貞女、生む時も童貞女、生みて後も猶童貞女に止まる者は、我等の拯救を生みて、罪に服せし者を救ひ給へり。

【應答歌】

我等の形を取り、身にて十字架を忍び給ひしハリストス神よ、爾の復活を以て我を救ひ給へ、爾は人を愛する主なればなり。

【復活コンダク】

死の權は已に人人を捕ふる能はず、蓋ハリストスは降りて其力を敗りて滅し給へり。地獄は縛られ、預言者は同心に喜びて呼ぶ、救世主は信に居る者に現れたり、信者よ、復活して出でよ。

第八の調

【復活トロパリ】

惠深き主よ、爾は高きより降り、三日の葬を受けて、我等を苦より釋き給へり。吾が生命と復活なる主よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も【生神女讃詞】

我等の爲に童貞女より生れ、十字架に釘うたるるを忍び、神なるに因りて死にて死を滅し、復活を顯しし仁慈なる主よ、爾の手にて造りし者を棄つる母れ。慈憐の主

よ、爾が人を愛する愛を顯して、我等の爲に祈祷する所の爾を生みし生神女を受  
け給へ、吾が救主よ、望を失ひし人人を救ひ給へ。

【應答歌】

攜香女は生命を賜ふ主の墓の前に立ちて、不死なる主宰を死者の中に尋ねしに、天  
使より福音の喜を受けて、使徒等に傳へて云へり、ハリストス神は復活して、世界  
に大なる憐を賜へり。

【復活コングク】

大仁慈なる主よ、爾は墓より復活して、死せし者を興し、アダムを復活せしめ給  
へり。エワは爾の復活を樂しみ、世界の極は爾が死より興きたるを祝ふ。

「スポタ」晩課の生神女ドグマティカ

第一調

人より生れて主宰を生みし全世界の光榮と天の門なる童貞女マリヤ、諸天使の歌、  
諸信者の飾なる者を讃め歌ふべし。彼は天と均しく、神の宮と均しき者として顯  
れたり、彼は仇の隔を破りて和睦を結び、國を開けり。我等は彼を信の固と爲し、彼  
より生れし主を扨ぎ衛る者と爲す。勇めよ、神の民よ、勇めよ、主は敵に勝たん、

全能者なればなり。

## 第二調

恩寵來りて、法律の影は去れり、蓋燃ゆる棘の焚けざりし如く、童貞女は生みし後も永く童貞女なり。燄の柱の代に義の日は出でて光る、モイセイの代に我が靈の救者ハリストスは現れたり。

## 第三調

最尊き者よ、我等如何で爾が神人を生みしに驚かざらん。至りて玷なき者よ、爾は夫の誘を受けずして、世の無き先より母なく父より生れ、聊かも變易、或は混淆、或は分離を受けず、一の性の質を全うして守れる子を父なく身にて生めり。故に母、童貞女、女宰よ、正しく爾を生神女と承け認むる者の靈の救はれんことを彼に祈り給へ。

## 第四調

生神女よ、爾に因りて神の先祖と爲りし預言者ダワイドは、爾に大なる事を爲しし者に、爾の事を歌ひ呼べり、女王は爾の右に立てり。蓋父なく爾より甘じて人の性を取りし神ハリストス、大にして裕なる憐を有つ主は、爾母を生命の中保者と現せり、是れ慾に朽ちたる己の像を改め、山の中に迷ひし羊を獲て、肩に置き、父

の前に攜へ、己の旨に協はせ、之を天軍に合せて、世界を救はん爲なり。

### 第五調

昔紅の海にて婚姻を知らざる聘女の象記されたり。彼處にはモイセイ、水を分つ者、此處にはガウリイル、奇跡に務むる者なり。彼の時イズライリは足を濡らさずして深處を歩み、今童貞女は種なくしてハリストスを生めり。海はイズライリの涉りし後元のまま過られず、玷なき者はエムマヌイルを生みし後元のまま玷なし。永遠にして最永遠なる者、人となりて現れし神よ、我等を憐み給へ。

### 第六調

至聖なる童貞女よ、誰か爾を讚美せざらん、誰か爾の至りて淨き産を歌はざらん。世の無き先に父より光る獨生の子は爾淨き者より言ひ難く身を取りて出で、本性の神は我等の爲に本性の人と爲れり、其位一にして相分れず、其性二にして相失はず。淨くして至りて福なる者よ、我が靈の憐を蒙らんことを彼に禱り給へ。

### 第七調

生神女よ、爾は性に超えて母と識られ、言と智識に踰えて童貞女に止まれり、舌は爾の産の奇跡を言ふ能はず。蓋潔き者よ、爾の降孕は至榮にして、産の状は悟り難し、神の欲する所には天性の法勝たるればなり。故に我等皆爾を神の母と識

りて、切に爾に求む、我等の靈の救はれんことを禱り給へ。

### 第八調

天の王は人を愛するに因りて地に現れ、人と偕に在せり、蓋淨き童貞女より身を取り、人の性を有ちて生れし者は、二の性にて一の位ある獨一子なり。故に我等彼が實に全き神及び全き人なるを傳へて、ハリストス吾が神を承け認む。夫を識らざる母よ、我が靈の憐を蒙らんことを彼に祈り給へ。

年中主曰「ネポロチニ」後の復活トロパリ「主や、爾は崇め讃めらる」

### 第五調。

主よ、爾は崇讃めらる。爾の誠を我に訓へ給へ。

救世主よ、天使の軍は爾が死者の内に入れど、死の力を亡ぼしアダムを己と共に起し、衆人「衆」を地獄より救ひ給ひしを見て驚けり。

主よ、爾は崇讃めらる。爾の誠を我に訓へ給へ。

墓の中に光る天使は携香女に謂へり。女弟子よ、何ぞ香料を悲の涙に交ふる。墓を見て悟れよ、救世主は墓より復活せり。

主よ、爾は崇讃めらる。爾の誠を我に訓へ給へ。

携香女は朝早く泣きて爾の墓に往きしに天使其前に立て云へり。泣く時は過ぎたり、涙を止めて、使徒に復活を告ぐべし。

主よ、爾は崇讃めらる。爾の誠を我に訓へ給へ。

救世主よ、携香女は香料を携へ、爾の墓に来て泣きしに天使之に謂へり。何ぞ生ける者を死者の中にとありと思ふ、彼は神として墓より復活せり。

光榮は父と子と聖神に歸す。

父と其子と聖神、一體の聖三者を拜みて、セラフイムと偕に呼ばん、聖、聖、聖なる哉主や。

今も何時も世々に、「アミン」。

童貞女や爾は生命を賜ふの主を生みて、アダムを罪より救ひ、エワに悲に易へて喜を賜へり。爾に身を取りし神人は生命を落しし者を率いて復生命に向はせり。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」神や光榮は爾に歸す。三次

「スポタ」「ネポロチ」「後のトロパリ

主や爾は崇め讃めらる。爾の誠を我に訓へ給へ。

聖人の群は生命の泉と天堂の門を得たり、願はくは我も痛悔を以て道を得んことを、我は亡びし羊なり、救世主よ、我を呼び返へして救ひ給へ。

主や爾は崇め讃めらる。爾の誠を我に訓へ給へ。

神の羔を傳へ、己も羔の如く屠られて、老いざる永久の生命に移りし聖なる致命者よ、我等に債の赦を賜はんことを切に祈り給へ。

主や爾は崇め讃めらる。爾の誠を我に訓へ給へ。

狭く苦き路を通り、生ける十字架を衡の如く負ひ、信じて我に従へる衆人よ、來りて、汝の爲に備へたる褒賞と天の榮冠を樂めよ。

主や爾は崇め讃めらる。爾の誠を我に訓へ給へ。

我は罪惡の瘡を負へども、爾が言ひ難き光榮の像なり、主宰よ爾の造りし者に隣を垂れ、爾の恵にて淨め、切に望める生國を我に與へて、我を復天堂に住

む者となし給へ。

主や爾は崇め讃めらる。爾の誠を我に訓へ給へ。

昔我を無きより造りて、爾が神たる形にて飾り、戒を犯すに因りて復我を我が出し地に歸へしし主よ、我を神の肖に適ふ位に升せ、古の美きを以て我を

あらた  
改め給へ。

主や爾は崇め讃めらる。爾の誠を我に訓へ給へ。

神よ、爾の僕婢を安ぜしめて聖人の群と義人が日の如く光れる天堂に入れ給へ、  
爾の眠りし僕婢を安ぜしめて、其悉の過を思ふ勿れ。

光榮は父と子と聖神に歸す。

一の神性の三の光を敬み歌ひて呼ぶ、無原の父と、同無原の子と、聖神よ、爾  
は聖なり、我等信を以て爾に勤る者を照して、永遠の火より出し給へ。

今も何時も世々に、「アミン」。

衆人の救ひの爲に身にて神を生みし浄き者よ、慶べ、人の族は爾に因て救を得  
たり。潔くして讚美たる生神女よ、願はくは我等も爾に因て天堂を得んこと  
を。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」神や光榮は爾に歸す。 三次

### 主日早課順序の復活福音經の後のトロパリ

ハリストスの復活を見て、聖なる主イイス獨罪なき者を拜むべし、ハリストス  
よ、我等爾の十字架を拜み、爾の聖なる復活を歌ひ讚む、爾は我等の神なればな

り、爾の外他の神を知らず、唯爾の名を稱ふ。信者よ、皆來りてハリストスの聖なる復活を拜むべし、十字架にて歡喜は全世界に臨みたればなり。我等恒に主を讚揚げて、其の復活を崇歌はん、主は十字架に釘うたるるを忍びて死を以て死を亡ししによる。

### 第五十聖詠の後。第六調

光榮は父と子と聖神に歸す。

聖使徒の祈禱に依て、憐深き主よ、我等の多くの罪を淨め給へ。

今も何時も世々に、「アミン」。

至聖なる生神女の祈禱に依て、憐深き主よ、我等の多くの罪を淨め給へ。

神よ、爾の大なる憐に因て我を憐み、爾が恵の多きに因て我の不法を抹し給へ。

預め言ひし如くイイスス墓より復活して、我等に永遠の生命と大いなる憐を賜へり。

### 主日早課と聖體禮儀の八調の提綱(ポロキメン)

#### 第一調

【早課ポロキメン】

主しゅ曰いわく、我われ今いま興おこき執とらへられんとする者ものを危あやうからざる處ところに置おかん。

句 主しゅの言ことばは淨きよき言ことばなり。

【聖體禮儀ポロキメン】

主しゅや我われ等ら爾なんじを頼たのむが如ごとく、爾なんじの憐あわれみを我われ等らに垂たれ給たまへ。

句 義ぎ人じんや主しゅの爲ために喜よろこべ、讚さん榮えいするは義ぎ者しゃに適かなふ。

第二調

【早課ポロキメン】

主しゅ我われが神かみよ、起おきて爾なんじが定さだめし審しん判ばんを行おこな給たまへ、萬ばん民みん爾なんじを環めぐらん。

句 主しゅ吾わが神かみや、我われ爾なんじを頼たのむ我われを救すくひ給たまへ。

【聖體禮儀ポロキメン】

主しゅは我われが力ちから、我われが歌うたなり、彼かれは我われが救すくひとなれり。

句 主しゅは嚴きびしく我われを罰ばつしたれども我われを死しに付わたさざりき。

第三調

【早課ポロキメン】

諸しよ民みんに謂いふべし、主しゅは王おうたり、故ゆに世せ界かいは堅けん固こにして揺うごかざらん。

句 新なる歌を主に歌へ、全地よ、主に歌へ。

【聖體禮儀ポロキメン】

句 吾が神に歌ひ歌へよ、吾が王に歌ひ歌へよ。  
句 萬民や手を拍ち歡びの聲を以て神に呼べ。

第四の調

【早課ポロキメン】

句 主よ、起きて我等を佑けよ、爾の憐に因て、我等を救ひ給へ。  
句 神よ、我等は己の耳にて聞けり、吾が列祖は我等に述べり。

【聖體禮儀ポロキメン】

句 主や、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作れり。  
句 我が靈や、主を讚揚げよ、主吾が神や爾は至て大なり。

第五調

【早課ポロキメン】

句 主吾が神よ、起きて爾の手を擧げよ、爾世々の王なればなり。  
句 主や、我心を盡して爾を讚め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳へん。

【聖體禮儀ポロキメン】

主しゅや爾なんじは我等われらを保たもち、我等われらを護まもりて斯世このよより永遠えいえんに至いたらん。  
句 主しゅや我われを救すくひ給たまへ、蓋義人けだしぎじんは絶たえたり。

第六調

【早課。ポロキメン】

主しゅよ、爾なんじの力ちからを興おこし、來きたりて、我等われらを救すくひ給たまへ。  
句 イズライリの牧者ぼくしやよ、耳みみを傾かたぶけよ、イオシフを羊ひつじの如ごとく導みちびく者ものよ、己おのれを顯あらわせ。

【聖體禮儀。ポロキメン】

主しゅや爾なんじの民たみを救すくひ、爾なんじの業ぎように福ふくを降くだし給たまへ。  
句 主しゅや我われ爾なんじに呼よぶ、我われの堅堡かためや、我わが爲ために黙もたす勿なかれ。

第七調

【早課。ポロキメン】

主しゅ吾わが神かみよ、起おきて爾なんじの手てを舉あげよ、苦くるしめらるる者ものを永ながく忘わするる母なかれ。  
句 主しゅよ、我われ心こころを盡つくして爾なんじを讚ほめ揚あげ、爾なんじが悉ことごとくの奇き迹せきを傳つたへん。

【聖體禮儀。ポロキメン】

主しゅは其民そのたみに力ちからを賜たまひ、主しゅは其民そのたみに平安へいあんの福ふくを降くださん。

句 神かみの諸子しよしよ、主しゆに献けんぜよ、光榮こうえいと尊貴そんきとを主しゆに献けんぜよ。

第八調

【早課ポロキメン】

主しゆは永遠えいえんに王おうとならん、シオンよ、爾なんじの神かみは世々よよに王おうとならん。  
句 我われが靈たましいよ、主しゆを讚揚ほめあげよ、我生われいける中主うちしゆを讚揚ほめあげん。

【聖體禮儀ポロキメン】

主しゆ爾等なんじらの神かみに誓ちかいをなして償つぐなへよ。

句 神かみはイウデヤに知しられ、其そのの名なはイズライリに大おおいなり。